

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

## 日本の拳遊戯(中)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2014-12-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 浩徳, TAKAHASHI, Hironori メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/19">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/19</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 日本の拳遊戯（中）

高 橋 浩 徳

## 第5章 比較の拳

### 1. 幕末までの比較の拳

江戸時代当初まで、比較の拳の記録が無いことは第3章で述べた。比較の拳は江戸時代に発生した拳である。いつ頃発生したかをこれから考察する。とてつる拳の流行による劇的变化が起きる江戸時代末期の弘化四年（1847）以前に見受けられた比較の拳は以下の通りである。

#### (1) 虫拳

虫拳は同時に指一本を出して勝敗を争う拳である。親指（蛙）と人差し指（蛇）と小指（蛞蝓<sup>なめくじ</sup>）の三つを用い、蛇は蛙に勝ち、蛙は蛞蝓に勝ち、蛞蝓は蛇に勝つ3すくみの拳である。

セップ・リンハルト氏は「日本一古い拳は虫拳」<sup>43)</sup>としている。理由として『石山寺縁起絵巻』に虫拳らしき動作をしている絵が描かれていることと、沖縄や奄美で虫拳が残っており、柳田国男が「沖縄諸島には日本の一番古いものが残っている」という説を掲げているから、としている。筆者は『石山寺縁起絵巻』の絵は虫拳でないと考え、その理由は本稿の第3章で述べた。現在発見されている江戸時代のすくみ拳の史料で最も古いものは『根無草』であり、虫拳が最も古いという可能性はあると考える。『遊びの大事典』は「藤八拳に続いて考案されたのが虎拳と思われる」「『虫拳』の発案もいつ頃からか定かではないが（中略）おそらく『虎拳』に続いて考案されたものと推察できる」<sup>44)</sup>としているが『根無草』の記述を見落としていると考えられる。

『根無草』は風来山人（平賀源内、享保十三（1728）年～安永八（1780）年）の著作である。そこでは次のような表記になっている。

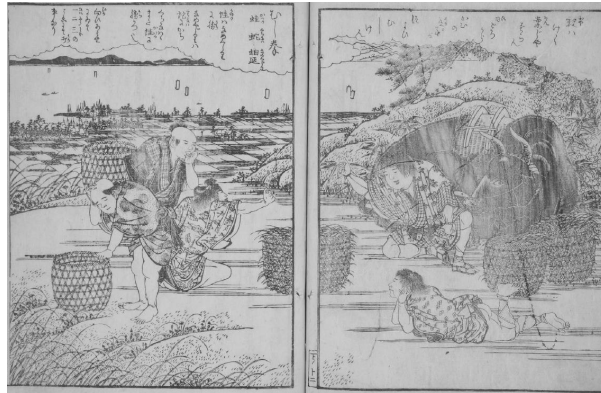
「ぼんぱち、火まはし、道具まはし、八兵衛／＼<sup>びょうえ</sup>八兵衛、地口、どぐわんす、<sup>ら かん</sup>羅漢舞、<sup>まひ かげ</sup>陰絵、<sup>こはいろ</sup>声色、<sup>ちうがへ</sup>中返り、男は女は、<sup>し し</sup>獅子ちよきりちよ、<sup>とう こ</sup>投壺の矢数、<sup>けん へんくわ</sup>拳の変化、蛇は<sup>なめぐじ</sup>蛞蝓にまけ、<sup>なぬし</sup>里長は<sup>あやま</sup>狐に誤る。我を忘れ人を忘れ、<sup>わらんべ かへ ぐ</sup>童に還り愚に及ぶ。」（注：句読点は筆者が付した）

ここに列挙されているのは遊びである。残念ながら多くはどのような遊戯かわからない。「蛇は蛞蝓にまけ」は蛇と蛞蝓と蛙で行う虫拳、「里長は狐に誤る」は庄屋と狐と獼師で行う狐拳である。「拳の変化」という箇所だが、拳遊戯が変化している、と移り移り変わりを述べていると考えられる。例えば蛙が蛇に勝っていたのが負けるようになった、というのは考えにくい。蛙が蛇に負けるのは理由があるからである。里長と狐の関係も同様で、以前は庄屋が狐に勝っていたということはないだろう。であれば、「拳の変化」という表記は、こういう拳が新たに登場してきたと解せられるのではないだろうか。であれば、この頃に虫拳や狐拳が新しい拳遊戯として登場したと考えられる。これ以前にあった拳は『吉原細見』などに多く見られる本拳に他なるまい。だとすれば、これ以前にすくみ拳の資料が無いことも説明がつく。

『風来山人集』（岩波書店、中村幸彦校注）の『根無草』には「拳の変化」の箇所に校註が付いており、「種類の違った拳を続けざまにすること。拳会角力図会には<sup>まぜけん</sup>交拳とあるものか。」<sup>45)</sup>となっている。しかし『<sup>けんさうへすまい ず え</sup>拳会角力図会』（義浪・吾雀、文化六（1809）年）の交拳の項では、交拳は本拳と虫拳を交互に打つことと説明されている。この校註は勘違いで「拳の変化」は交拳のことではない。虫拳と狐拳を交互に打つ交拳がなかったとはいいきれないが、数の拳である本拳とすくみ拳の虫拳を交互に打つから妙味があるのであって、同じすくみ拳の虫拳と狐拳では面白味がない。明治の遊戯の本である『御伽智恵競』（立野藤治郎、山岸佐吉、明治十四年）や『拳の打振り』（小西可東、春江堂、明治四十二年）にも本拳と虫拳とあり、なんでも良かったわけではない。

『拳会角力図絵』の絵では虫拳は子供が打っているが、他の拳はすべて大人が打っている。また『嬉遊笑覧』（喜多村信節、文政十三（1830）年）に「右の拳（本拳）より後さまざまの拳出きぬれど。行はるゝは狐拳なり。虫拳などは唯童部のなぐさみ也。蛙と蛇と蛞蝓。相制するをもて勝負をなす。」とあり、また『<sup>おさなあそびむかしひながた</sup>尾張童遊集』（天保二（1831）年）や『幼稚遊昔難形』（天保十四（1843）年）にも子供の遊びとして載っているところから、虫拳は主に子供の遊びで大人の場合は現在のじゃんけん同様、単に一人を決めるために行う程度の拳だったと考えられる。式亭三馬の『浮世風呂』（文化

日本の拳遊戯（中）



【図28 虫拳（『拳会角力図絵』）】

六（1809）年には、

「あれ程虫拳をして一極めをしたじゃあねえか。」

とあり、河竹黙阿弥の芝居狂言「三人 吉三廓 初買」<sup>さんにんきさくくわのはつかい</sup>（安政七（1860）年）の「庚申塚場」にも、

「お嬢吉三『そんならこれをここへ掛け』

お坊吉三『虫拳ならぬ』

兩人『この場の勝負』」

とある。まだじゃんけんは一般的ではなかったと考えられる。



【図29 虫拳『尾張童遊集』】



【図30 虫拳『幼稚遊昔雛形』】

虫拳を題材にした小説がある。『三虫拇戦』<sup>むしけん</sup>（文政二（1819）年）と『児雷也豪傑譚』<sup>じらいやこうけつたん</sup>（天保十（1806）年）である。

『三虫搦戦』は柳亭種彦（天明三（1783）年～天保十三（1842）年）作の物語本である。内容は因果物で、誤って蛇、蛙、蛭螭の三匹を殺してしまった男の妻が、三年続けて虫の夢を見て子を生む。祟りだと思った男は三人の子を捨てる。十数年後、成長した三人の子供は数奇な運命で巡り合い、恋愛や殺人に発展する。

『地雷也豪傑譚』は、美図垣笑顔、柳下亭種員、<sup>みずがきえがおりゅうかていたねずりゅうすいていたねきよ</sup>柳水亭種清らにより出版された読本で天保十年から明治元年まで刊行された。主人公の児雷也は妖術を使い蝦蟇を登場させる。宿敵の大蛇丸は蛇に化け、蛙は蛇に負けそうになるのだが、ヒロイン綱手姫がなめくじとなり、その力を借りて大蛇丸を倒すのである。この物語は歌舞伎狂言にもなり、また『豪傑地雷也』（1921年、日活）、『忍術地雷也』（1955年、新東宝）、『怪竜大決戦』（1966年、東宝）と映画にもなっている。ただ『怪竜大決戦』では綱手姫は大蜘蛛に化身する。ヒロインが蛭螭の化け物ではイメージが損なわれると考えての配慮だろう。「綱手が化身するのは原作ではナメクジで、オロチ、ガマと三すくみとなるのだが、人気女優・小川知子が演じるにはオドロオドロしすぎるということで、クモに変更されたという経緯がある。」<sup>46)</sup>という裏話がある。



【図31 怪竜大決戦のDVDとビデオのパッケージ】

## (2) 虎拳

虎拳は全身を使う拳である。虎と和唐内とその母親の三種類で行う。全身で行う拳で虎は四つんばいになり、和唐内は槍を持つ格好をし、母親は杖を突く格好をする。虎は母親に勝ち、母親は和唐内に勝ち、和唐内は虎に勝つ。和唐内は近松門左衛門（承応二（1653）年～享保九（1725）年）の『国姓爺合戦』（正徳五（1715）年）の主人公で虎

退治をする場面がある。競技者は互に見えないよう屏風や衝立の両側に立ち、音楽に合わせていずれかの格好をし、前に出て勝敗を決める。現在でも酒宴の席で行われることがある。その際には三味線を伴奏に俗曲「和唐内」が歌われる。歌詞は次の通りである。

「千里を走るよな、藪の中を皆さんのぞいてごろうじませ。金の鉢巻たすきに和藤内がえんやらやっと、とらえしけだものは、とらと～らと～らとら。」

この最後の「とらと～らと～らとら」を繰り返し、このときに屏風や衝立の両脇から姿を現し勝敗を決めるのである。和唐内を虎退治で知られる加藤清正に置き換えて清正じゃんけんと言うこともある。これは親しみを増すために和唐内を日本人に置き換えたものと考えられる。

虎拳は全身を使う拳であり、四つん這いになるなど屋内でないと行にくい。『拳会角力図絵』や『北斎漫画』にあるように主に座敷で行われたと考えられる。洒落本などでもそのような状況で登場する。



【図32 虎拳（『拳会角力図絵』）】



【図33 虎拳（葛飾北斎『北斎漫画』）】

黄表紙『文武二道万石通』（朋誠堂喜三二、天明五（1785）年）では、三人の男が様々な遊びについて文か武かを論じている場面で語られる。

「『底倉あそびのかたがたは、身ぶり・声色・相撲・拳、みな武辺の内へしるしませう。』『同じ拳でも、本拳は文の場がござります。とら拳は武の事さ。』」

つうげんそうまがき

『通言総籙』（山東京伝、天明七（1787）年）では、幫間が客に、

「『モシ喜之様、とらけんはどふでござりまする。』『また負かそう思て。』」

と拳を持ちかけている。

同じ山東京伝の『通気粹語伝』（天明八（1788）年）では、遊郭で実際に打っている場面が登場する。



「武『おゑんぼう、とらけんで一ツいかふ。』ゑん『わっちゃアいや。おめへのやうなとらけんの上手な人と。イヤイヤこのじうも深川のとみおかで歌うたひの燕青さんと、一両がけで、でへぶかちなつたそふだ。』林『インヤおゑんもとらけんは妙だよ。やってみや／＼。』ゑん『そんなら松さん、じぶくりっこ<sup>47)</sup>なしだよ』花『ドリャおれが合かふに出やうか』トいふゆゑ武松、おゑん、きゆうに目くばせして。武・ゑん『シャン／＼／＼』わざとふたりながらとらをする。林『それ、あいかふだ。』」

虎拳は現在でも虎拳の他、とらとらや和唐内などの名称で花柳界で行われている。

### (3) 狐拳

狐拳は腕を使う拳である。2人で向かい合い、指を延ばした手を上げて狐の耳を表す狐、両手を軽く握って胸の前に出し、鉄砲を構えるような形にする獺師（または鉄砲）、両手を膝や腿の上に置く庄屋（または旦那）の三種類のいずれかを同時に出す。狐は庄屋に勝ち、庄屋は獺師に勝ち、獺師は狐に勝つ。庄屋拳、在郷拳、鉄砲拳などと呼ばれることもあるが狐拳が最も多く使われる。



【図34 狐拳（『青楼美人合』）】



【図35 庄屋拳（『拳会角力図絵』）】

狐拳という言葉が登場する最も古い史料は洒落本『見通三世相』（寛政八（1796）年）で、

「さあ、きつね拳でてうしをかへにいかう。」

と一言だけ出てくる。しかし、絵としては明和七（1770）年、鈴木春信の『青楼美人合』に拳を打っている遊郭の女性の図があり、これは左が狐で右が獺師の狐拳と考えられる。本拳に見えないこともないが、別に本拳を打っている図があり、この図は本拳で

はありえない。

次節で述べるが、この後に流行する拳はほとんどが狐拳の形を取っており、浮世絵なども狐拳を打っている図が多い。『嬉遊笑覧』（文政十三（1830）年）にも、

「右の拳<sup>48)</sup>より後さまざまの拳出きぬれど、行はるゝは狐拳なり。虫拳などは唯童<sup>わらわ</sup>部のなぐさみ也。」

とあり、虫拳は子供の遊びで、大人が遊びのために行ったのは狐拳としている。江戸時代後期、最も多く行われたのはこの狐拳であったと考えられる。

#### (4) 大仏拳

大仏拳も腕を使う拳である。洒落本『一向不通替善連<sup>いつこう ふつうかわり せ ん</sup>』（山跡蜂満、天明八（1788）年）に登場する。

「『此頃みなみではやる大仏拳をしつているか。』『ション／＼／＼と手を三つ打って、左の手を広げて右の手を親指と人差し指を輪にして後を広げるが大ぶつよ。そして両方の手を持って合羽を脱ぐまねが細工人、そしてこう拝むのが参詣の人よ。大仏と参詣の人じゃア人がまけ。大仏とさいく人じやア大ぶつがまけさ。細工人がさんけいの人にまけよ、ヨシカ』」

『一向不通替善連』には文章の間に絵が書かれている。大仏拳はこの本以外に資料が見つからない。明治時代の民俗学者、山中共古（嘉永三（1850）年～昭和三年（1928）年）は『砂払』の中で江戸時代の多数の著作物に注釈を付けており、『一向不通替善連』のこの部分にも、

「かゝる拳、南ではやるといへば品川にて流行せしものと見ゆ。（合羽大仏ありし故なり）」<sup>49)</sup>



【図36 大仏拳、左から大仏、細工人、参詣人（『一向不通替善連』）】



と書いているが、実際にあったものではなく作者山跡蜂満の創造物ではないだろうか。

#### (5) レサノット拳

これは仮称である。平戸藩主、松浦清（宝暦十（1760）年～天保十二（1841）年）の随筆『甲子夜話』に

「世に行はるる虫拳、狐拳、虎拳など云こと普く人の所識、所謂<sup>サンクスミ</sup>三縮にて、蛇は蝦蟇に勝ち、蝦蟇は蛞蝓に勝ち、蛞蝓は蛇に勝つなり。先年露西亞<sup>ろしあ</sup>の使者レサノットと云しが蝦夷にて授りし信牌を持して、長崎に入津せしとき、月を踰て崎に在けるが、世に崎尹<sup>きみん</sup><sup>50)</sup>の取計り<sup>い</sup>何かがなど云扱<sup>いひあつか</sup>ひて、その拳戯を作れり。一は崎尹、一は魯西亞の使者、一は遊女なり。遊女は崎尹に勝つこと能わず、崎尹は使者に勝つこと能わず、使者は遊女に勝つこと能わず。何者か作りけん。一笑（この滞留の間、使者の為に遊女を侍り置たるが、使者愛して、これに万物品々を与えたりと云へり。因て此戯をせりとぞ。）」とある。

レザノフ（Nikolai Petrovich Rezanov, 1764年～1807年）はロシアの大使として文化元（1804）年に長崎に入港している。すくみ拳は世情を反映して新しいものが作られていたことがわかる。

#### (6) 大坂拳

山桜漣々、逸軒揺舟著『拳独稽古』（文政十三（1830）年）には大坂拳というすくみ拳が載っている。

「大坂拳 此の拳は呼び声なし、只ゆひばかり出して、先のゆひ、此の方のゆひと出して見、たとへは先二而握り出せしとき、此方二而一本出したるは、一本のかたかち也、先二而一本出し、此方二本出したるは、二本のかた勝也、かくの如く一本ましを勝ちとす、余のゆひかづとなれは、勝ちまけなし、先二而五本出せし時は無手に而取なり。余はしゆんじ知へし。（この拳は掛け声を出さず、指だけ出し、相手の指と自分の指を出して（勝ち負けを）見る。例えば相手が握りこぶしを出して、こちらが指を一本出せば一本が勝ちである。例えば相手が（指を）一本出して、こちらが指を二本出せば二本が勝ちである。このように一本多い方を勝ちとする。その他のときは勝ち負けなしである。相手が五本なら無手（0本＝握りこぶし）が勝つ。後は順次その通りである。）」

現在、熊本県人吉市とその周辺には球磨拳と言う名称の拳が残っている。球磨拳は一つ多い数を出した方が勝ちで、0本は5本に勝つという6すくみで、この『拳独稽古』の大坂拳と同じである。大坂拳の名称は、大坂で行われていたことに由来すると考えられる。球磨拳は人吉とその周辺で発生したわけではなく、もっと広い地域で行われていたものが現在行われている地域を除いて消滅してしまったものと考えられる。

(7) 盲人拳<sup>めくら</sup>

『拳会角力図会』（文化六（1809）年）には4種類のすくみ拳が載っている。虫拳、虎拳、庄屋拳と盲人拳である。盲人拳は

「此拳双方ともに指を出さず、互いに一時に声を出し、向ふより一拳上をいひし方が勝ちなり。たとへば、むかふ<sup>イツコウ</sup>一といふとき、手前<sup>リヤン</sup>二といふこゑを出せば則（すなわち）勝なり。幾度にても一より十まで同じ事なり。」

と記されており大坂拳を口で行うものと言える。ただ、一が十に勝つ、という記述がないため完全なすくみではないが、これは記述で落ちているだけであろう。それが無いと有利不利ができてしまい、ゲームとして機能しないからである（全くできないという意味ではない）。実際に行われるときは、一が十に勝つと言うルールがあったものと考えられる。

(8) 豆拳

滑稽本『滑稽有馬紀行』（文政十（1827）年）には豆けんが登場する。京の男が有馬温泉に行き、芸者に豆けんを教わるシーンがある。

「みや『モシ、左様なら京で致します豆けんをさんじませう。オ『ナニ豆けんとは。みや『ナア申、旦那さん、ご存で御坐りませうが。太郎『アイ、成程。オ『コウ、わっちはしらない。おしへてくん。光『ハイ、左様なら、モシ、豆は手をケ様で御坐ります。ゑんはケ様<sup>かよう</sup>にいたします。是はきくで御坐り枅。』

この後実際に打つシーンも登場する。ゑんが豆に勝ち、豆がきくに勝ち、きくがゑんに勝つ。江戸後期の作家、西沢一鳳（享和二（1802）年～嘉永五（1852）年）の随筆『<sup>みやこのひるね</sup>皇都午睡』（嘉永三（1850）年）にも「所作拳」という項に「又菊々猴々豆々と云拳も有」とあり、同じものと考えられる。セップ・リンハルト氏は、

「大変きわどい内容の拳である。『日本国語大辞典』によると、豆は女陰を、菊はと

くに男色で肛門を意味している。そうであれば、「えん」は陰茎というよりほか説明のしようもない」<sup>51)</sup>

と解しているが、酒席の中には遊郭などでの男女によるものもあったわけで、遊戯もそのような場に相応しいものが当然あったと考えられる。後述するちょん脱げ拳や服を脱ぐ野球拳に通じるものと言えよう。

大坂拳や球磨拳で、2人が0から5までを指で示して勝敗を決めるのは本拳と同じものである。この拳の存在により、すくみ拳は本拳より派生したと考えたい。すくみ拳が何もないところから突然発生したとは考えがたく、また中国にすくみ拳があったという説もよく調べればすくみ拳ではなく、別な遊びという可能性の方が強い。そして、その後十九世紀の『酒令叢鈔』まですくみ拳が確認できないのも奇妙な話である。しかし、すくみ拳が中国から入って来たのではなく本拳から誕生したと言うことを考えれば、中国にすくみ拳の資料がないことは十分理解できる。すくみ拳は十八世紀の日本で本拳から派生して大坂拳や球磨拳と呼ばれる6すくみの拳として誕生したと考えられる。そして同じ指一本を出す虫拳が大坂拳より生まれたと考えるのが合理的であろう。

盲人拳は1から10までを使うので10すくみ、大坂拳は0から5までを使うので6すくみである。後の虫拳、虎拳、狐拳などはみな3すくみである。主流となるのは3すくみ拳であるので、本拳から大坂拳や盲人拳が生まれ、これが縮まる形で3すくみ拳が誕生したと考えられる。3すくみ拳に変化した理由であるが、物ごとを決めるためのものであるので、数が多くなるほど勝負がつかないことが多く、3すくみの方が合理的である。数学的に考えれば6すくみの場合、例えば一方が3を出していた場合、もう一方の出し方には0から5まで6通りあるが、勝負がつくのは2か4の二つの場合で残り四つの場合は勝負なしである。つまり3分の1である。これにくらべ3すくみの場合、同じものを出した場合以外は勝負がつくので3分の2である。何度も打っているうちにそのことに気づき、3すくみに落ち着いていったものと考えられる。

## 2. すくみ拳の流行

### (1) とてつる拳

拳の世界に大きな変化が起こるのは、江戸時代末期の弘化四（1847）年である。この年の正月十二日より、江戸の芝居小屋の一つ、河原崎座で「<sup>のりかけ そ が どうちゅうすころく</sup>飾駒曾我道中双六」という芝居狂言が掛けられた。この五段目の浄瑠璃「<sup>わらうかどにわかやしちふく</sup>笑門俄七福」で拳の入る舞踊が行われた。これが「とてつる拳」という名称で江戸中の大ヒットとなった。その模様は下記のように、複数の史料に書かれている。

「ことし未の春より流行するとてつる拳じゃんじゃがぶし、酒は拳酒色品は、かえるひよこひよこ三ひよこひよこ、蛇ぬら／＼なめくで参りましよ、すちやらかちやん、ソレじやんじやら／＼じやん拳な、婆様に和藤内がしかられた、虎がはう／＼とてつるてん、狐でサアきなせ、まいりましよ、チョチョンがよんやさ、此戯れ拳は、猿若町三町目なる河原崎権之助が芝居にて、三代目中村歌右衛門、六代目松本幸四郎、市川九蔵にて、舞台にて致せし由、一枚絵にも摺出し、追々に替歌出来て、専らの流行とはなりぬ。」（塵哉翁『巷街贅説』文政十二（1829）年）

「此の節猿若町河原崎座にて、とてつる拳の狂言大当たり…稽古本を買て、皆々往来をけんしながらかゑるものなり けんとふも違へず当たる成駒や 江戸市川で客はまつ本 とてつる拳 酒は拳酒いろ品は（以下略）」（藤岡屋由蔵『藤岡屋日記』）

「弘化四年 河原崎芝居春の狂言に、虫拳、狐拳、虎拳の所作を催しけるが、世に行はれて諸人酒席の戯れにこれを真似たり。」（喜多川信節『武江年表』）



【図37 鸚鵡石<sup>52)</sup>とてつる拳】

とてつる拳の歌詞は『巷街贅説』の通りだが、浮世絵では「きつねでさあきなせ」で終わっているものが多い。これを歌って踊り、最後に拳を打ったわけである。中に歌わ

れているのは複数の拳である。蛙と蛇となめくじは虫拳、婆様と和唐内と虎は虎拳、最後の狐は狐拳である。途中に「じゃんじゃかじゃかじゃかじゃんけん」という言葉があるので「じゃんけん」が含まれていると解釈できなくもないが、他が拳を構成する要素を挙げていることから、これは単なる囃子の音と解釈すべきだろう。この歌の最後に打つ拳の形であるが、この歌詞が載っている多くの浮世絵が狐拳を打っている構図になっていることから狐拳であったことがわかる。

この拳は非常に流行したようで、中にとてつるてんという言葉があるところから「とてつる拳」と呼ばれた。そしてすぐにそのパロディなどが作られている。『藤岡屋日記』によれば、二月廿日に浅草三筋で飯島可三という隠居が雨中口論の末に野々山式部という武士の首を切ると言う事件が起こった。この際、

「酒はけんのん隠居さん、首はートひょこみひょこひょこ、血はぬるぬる、けんしてまいりましょ、雨はざらざらざんざらだ、小僧はばん頭にしかられた、所は浅草三すじ町、御番所へさあきなせ」

という歌が作られたと載っているが、明らかにとてつる拳のパロディである。

また五月十日には十八、九歳の娘三人が家に帰らないため、親達が届け出、調べたところ橋から身投げをしていたという事件が起きた。このとき作られた歌も『藤岡屋日記』に載っている。

「流行拳 さても神田の稲荷河岸。女の身投げを引て来た。見物どろどろ山ほどだ。川から登ります。だんだん尋ねりや三人だ。男は番屋に縛られて。親達アなくなてこずりてん。気違いでサアきなせ。」「同段 さても今度の色死は。かゑる一日が三日四日。ぶらぶら気ままでまいりましょ。なんだかぼちゃぼちゃどんぶりこ。でたまま帰らないで叱られた。どらは平気でごめんなせ。身投げでサアきなせ。」

パロディの面白さは元ネタが知られていて初めて価値を持つ。とてつる拳は江戸中の人気を博し、拳遊戯の主流をも変える一大流行であった。

## (2) 所作拳

とてつる拳を契機に、芝居の中で歌って踊って拳を打つというのがいくつも作られている。同じ弘化四年九月には河原崎座で「<sup>たびすずめみよしのできあき</sup>旅雀三芳薨」が上演され、この中で「つくもの拳」が舞われた。歌詞は、

「つuitたはつuitたは、ぴったりぴたぴた。つくものはなににに。殿様にお槍、対の鉄

日本の拳遊戯（中）

箱、太夫に三味線、とてつる天狗に牛若、ヤアとう／＼まいった／＼、やととん／＼。またもくつつく座頭の川ごし、猪口にちろり、おさへてかさねて、きつねでさあきなせ。」

である。歌詞の最後は「きつねでさあきなせ」になっており、浮世絵を見ても形は狐拳であったことがわかる。



【図38 つくもの拳】

嘉永元（1848）年には「色品<sup>いろしな</sup>替<sup>か</sup>拳酒」の中で鶴亀蓬萊拳が舞われ、嘉永二（1849）年には「新規<sup>しんき</sup>一<sup>いつ</sup>拳<sup>けん</sup>西<sup>せい</sup>魁<sup>けい</sup>声<sup>せい</sup>」の中で三国拳が舞われた。鶴亀蓬萊拳は鶴と亀と松の3すくみで、鶴は片足で立ち、両手を重ねて高く上方に伸ばし鶴を表す。松は指を開いた両



【図39 鶴亀蓬萊拳の錦絵】



【図40 三国拳の錦絵】



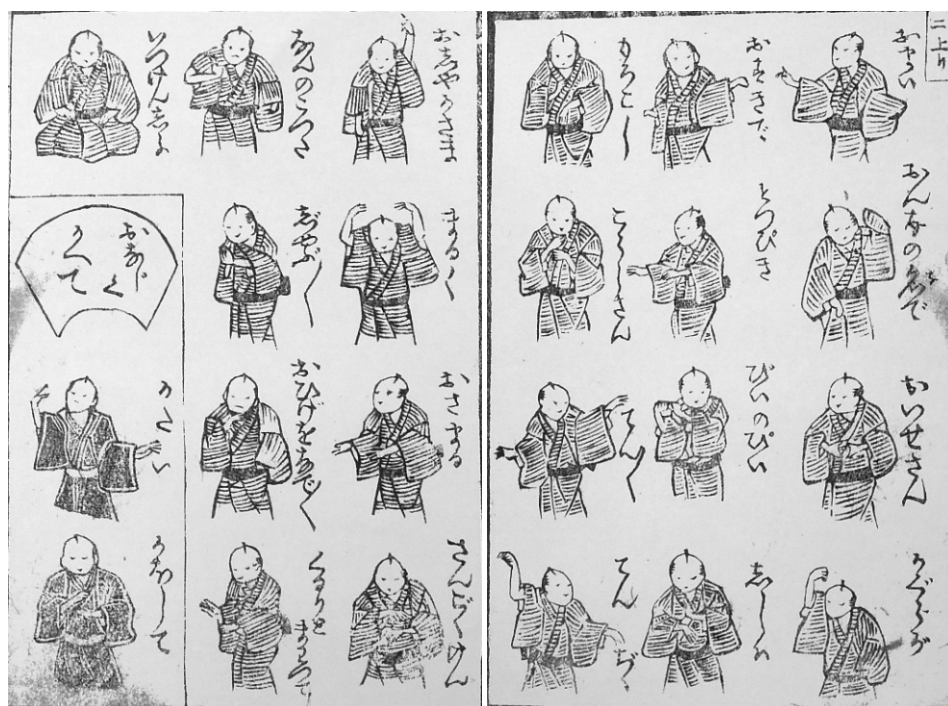
手を高さを違えて上げ、松の木を表す。亀は身を屈め、手をすばめて出し亀を表す。鶴は松に勝ち、松は亀に勝ち、亀は鶴に勝つ。歌詞は、

「蓬莱の鶴は千年亀は万年。鶴の背中に松生えて、そのまた枝へ巣を食うて、子を生む鶴の万万年。お茶の子出べそでおいでなせ。おめでたや。」

三国拳は日本と唐と天竺の三国がすくみになる拳で、日本は胸の前で両手の親指と人差し指で輪を作り天照大神を表し、唐は両手をあごの下に置いて孔子が髭を撫でる様を表し、天竺は片手を上げて天を指さし、もう一方の手は下に向けて地面を指さし、釈迦が天上下唯我独尊と唱える様を表している。日本は唐に勝ち、唐は天竺に勝ち、天竺は日本に勝つ。歌詞は、

「おまえ女の名でお伊勢さん。神楽がお好きでとっぴきぴいのぴい。獅子はもろこし孔子様。てんてん天竺お釈迦様。丸く治まる三国拳。なんのこったじゃぶじゃぶ、おひげをなでなで、くるりとまわって一拳しよ。」

上演の後には、浮世絵や鸚鵡石が出版され、江戸の人々はこれを買ひ、覚えて酒席で遊んだ。安政三（1856）年には歌の歌詞と振り付けの専門書として梅暮里谷義（寛政三



【図41 三国拳『拳早指南』】

（1750）年～文政四（1821）年）による『拳早指南』が出版されている。この本には、十種類の拳酒の歌詞と振り付けが記されている。

これらの拳は所作を伴う拳ということで所作拳と呼ばれた。上記のほかに所作拳としては「三曲拳」「いなせ拳」「吉原拳」「地震拳」「世直し拳」「地獄拳」「<sup>はつうま</sup>初午拳」「<sup>はしか</sup>麻疹拳」などがあり浮世絵が残っている。多くは形が狐拳で三人の人間が描かれている。拳は二人で打つが、三つの形を示さなければならないので三人を描いたのである。多くは歌詞のみだが振り付けが載っているものもある。とてつる拳の二番煎じを狙い様々な拳遊びが芝居の中で演じられたが、それだけとてつる拳の流行が大きなものであったと言える。

明治になっても兎の流行に伴う「兎拳」（明治五（1872）年）、西南戦争に伴う「薩摩拳」（明治十（1877）年）、寄席の人気者となった郭巨の釜掘りの四代目立川談志、ヘラヘラ踊りの三遊亭万橋、ステテコ踊りの三代目三遊亭円遊を用いた「三人拳」（明治十六（1883）年）、成田山新勝寺の開帳を扱った「開帳拳」（明治十八（1885）年）などの錦絵が残っている。しかし実際に行われた記述があるものはあまりなく、とてつる拳以外のものはどの程度実際に行われたかは疑問である。

様々な名前があるが絵を見る限り最後に打つ拳の形は狐拳を用いた物が多い。鶴亀蓬萊拳や三国拳は独自の形を取っているが、この二点くらいしかない。酒席の拳の流行は十九世紀半ばに本拳から狐拳に移って行ったと考えられる。

すくみ拳、なかでも狐拳が流行した理由は何であろうか。本拳は拳以外の部分が無い。一方、すくみ拳は歌と踊りがあって最後に拳を打つものであるが、この歌と踊りの部分が大変楽しいわけで、ここが本拳と比べて、すくみ拳、というより所作拳が大きく好まれた原因であろう。また形として狐拳が広く好まれた理由は勝敗の道理がわかりやすく理にかなっていることにあると考えられる。鶴亀蓬萊拳は鶴と亀と松で、亀が鶴に勝つのは千年生きる鶴に比べ万年生きる亀が勝つということは理解できるが、松が鶴に勝ち松が亀に勝つ理由が明確でない。三国拳となるとまったく理由が明確でない。狐拳は獵師が狐を撃ち、狐は庄屋を化かし、庄屋は獵師より身分が上と、やっていて納得のいく狐拳が、行う者に受け入れられたということであろう。

なお、拳遊戯で同じものを出すことをあいこと言うが、相拳や合い拳という言い方もあった。日本クラウンから発売されている『岩手の民謡(一)』というCDには相拳節が収

録されており、解説に岩手県西和賀町には相拳節またはあいこ節と呼ばれる民謡が伝わっていて、その歌詞は『相拳相拳と勝負はつかぬ 勝負わからぬ夜明けまで。相拳踊りなら負けても良いが 真剣勝負なら負けられぬ』となっている。服部龍太郎氏は『民謡のふるさと』で、

「福島県の飯坂に行って、その付近の民謡を聞いて歩いたとき、瀬ノ上府志と言うのにぶつかった。節そのものは格別とりえのあるものでないが、一種のあいけん節で有るところがおもしろかった。

( 1 ～ 3 番 略 )

／＼ ハーエーさきはお師匠お手やわらかに 狐ケンでは負けられぬ

／＼ ハーエーあいけんあいけんと勝負はつかぬ 勝負わからぬ夜明けまで。

／＼ ハーエーあいけん踊りなら負けてもいいが 真剣勝負にゃ負けられぬ」<sup>53)</sup>

と書いているがまったく同じ歌詞である。いつ頃からあった歌かはわからないが、狐拳が酒席での一般的な遊戯であったことを示すものであろう。

### (3) チョンキナ拳

明治維新前後には、チョンキナ拳が流行した。チョンキナは俗曲の一つで、蝶ン来ナと表記されることもある。歌詞は「チョンキナ、チョンキナ、チョンチョンキナキナ、チョチョンが菜の葉でチョチョンがホイ」だが、「菜の葉で」を「ヨイヤサデ」や「ナンノソノ」に替えたものも存在する。チョンキナ拳はこれに合わせて、自分の両手を叩いたり、自分の手と相手の手を打ち合わせたりする仕草をし、最後に拳を打つ。この拳は別名を横浜拳と呼ばれた。安政六（1859）年、開国と共に幕府は横浜に遊郭を開業し外国人の相手をさせた。ここに置かれた店は「チャブ屋」と呼ばれ、女郎は一名をらしやめんと呼ばれた。チャブ屋は chop house（チョップハウス、英語で軽食屋のこと）のことで、らしやめんは羅紗綿と書き、西洋人の相手をした日本人女性のことである。彼女たちが外国人相手の酒の席で行ったのが、チョンキナ拳やチョンキナ踊りであった。この替え歌としてチョン立て拳やチョン脱げ拳が行われた。チョン立ては最初座って打っていたものが、負けたら立つ決まりと考えられる。チョン脱げ拳は負けた者が一枚ずつ衣服を脱いでいくもので、これが駐留外国人に大いに好まれた理由である。近年、酒宴などで野球拳を行う際に衣服を脱いで行くのはこの拳の影響である。

もっともこの習俗に幕末に始まったわけではなく、『甲子夜話』に元文十（1719）年



【図42 清国南京人遊行横濱拳】

頃の記事として、

「御番衆五六人その辺の大黒屋七五郎が饌店に入り、芸妓と闘拳す。芸妓頗る技に熟す。因てご番衆、其衣類佩物を賭して争ふ」

とあるように、遊廓などで拳を打つ際負けた者が衣服を脱ぐことは前々からあったことだと考えられる。

チョンキナは明治維新以降も行われた。明治二十四年に廃止令が出されたことが新聞に載っている。

「●銘酒屋チョンキナ踊<sup>おどり</sup>を廃<sup>はい</sup>す 横浜市花咲町、桜木町、福島町辺にある銘酒屋一名チョンキナ屋といへる曖昧店は、主に外国人を<sup>あて</sup>的に娼売を営なみ銘酒屋といふは表向き、外国人の顔さへ見れば首の白い妖物がゲラ／＼と笑ひかけ、マツ来客を<sup>ひ</sup>ト間<sup>ま</sup>へ<sup>しょう</sup>請<sup>しょう</sup>じ、べこ／＼三味線を鳴してチョンキナ踊りを踊りト、非売物迄も<sup>も</sup>売<sup>う</sup>る事は市中一般の悪評となりしが、<sup>さぞ</sup>遠<sup>さぞ</sup>がに我が身ながら其の醜体に恥入しものか、此頃其チョンキナ屋中の一人は同業を招集し、いかにも我々が売物とするチョンキナ踊りは市中の評判甚だ悪く、<sup>つらつら</sup>熟<sup>つらつら</sup>々<sup>つらつら</sup>惟<sup>つらつら</sup>んみれば外国人に対し国辱を曝すの嫌ひなきにしもあらねば九月一日以後一同チョンキナ踊を廃すべしとの発議に一同速やかに此の議を賛成し、いよ／＼去月三十一日限りこの踊りを廃したるが、若し之れを犯す者は二円の違約金を出すの約束なりとは近頃大出来。」（東京朝日新聞、明治二十四（1891）年九月二日。読点は筆者が付した）

しかし、これ以降もお座敷遊びとしての拳遊びは遊戯の本などにも散見される。俗曲

としてのチョンキナはその後も残り、昭和の時代でもチョンキナの名をつけた歌謡曲がいくつも作られている。

### 3．所作拳以降のすくみ拳

明治以降、出版される遊戯の本が多くなり、それらにはいくつもの遊びが掲載されている。しかし、拳遊戯で新たなすくみ拳は数えるほどしかない。多くは別章で述べる対応の拳である。数が少ないのはほとんど狐拳と藤八拳だったからだと考えられる。複数の本に取り上げられている拳遊戯と現在も行われている拳遊戯を紹介する。

#### (1) おのえ けん 尾上拳

歌舞伎の「か が み やまこきょうのにしきえ加賀美山旧錦絵」の名場面“草履打ち”を題材にした拳である。3人の登場人物「岩藤」「尾上」「お初」の3すくみとなっている。「加賀美山旧錦絵」は容楊黨の作で、加賀藩を舞台に、中老の尾上が主役である。尾上はお家乗っ取りをたくらむ局の岩藤の恨みを受け草履で打たれると言う恥辱を受け、最期は自害してしまう。尾上の下女のお初は事実を知り、岩藤を殺して主人の仇を討つ、というものである。「岩藤」は草履を振り上げる形。「尾上」は左手を床につき、右手を上げて体を反らせ草履を避ける形、「お初」は指先を揃えて手をつき頭を下げる形である。岩藤は尾上に勝ち、尾上はお初に勝ち、お初は岩藤に勝つ。

#### (2) 立ち回り拳

同時に刀を構える形を作る。上段の構えは中段の構えに勝ち、中段は下段に、下段は上段に勝つ。

#### (3) 野球拳

大正十三（1924）年に愛媛県松山市の伊予鉄道野球部が高松市で試合をした際、当日夜の懇親会の席で、前田五健氏<sup>54)</sup>が考案して始めたと言われている。曲は長唄「元禄花見踊り」をアレンジしたものと言われている。その後、松山で宴会のたびに行われ広まって行った。三代目の家元である澤田藤静氏に聞いたところ、拳の形は当初狐拳であったが、次第にじゃんけんになんて変わっていったとのことである。昭和五十五年、テレビ



番組「コント55号の裏番組をぶっ飛ばせ！」の中で行われて全国的に知られるようになったが、番組では負けると服を一枚脱ぐというルールだったため、これが正式なルールのように受け取られてしまっている。現在も宴席、酒席などでそのような遊び方で行われているし、野球拳を知っている者の認識はそのようなものであろう。

松山市では昭和四十四年より毎年春に松山城山頂広場において本家野球拳全国大会が開かれている。もちろんここでは服を脱ぐことはない。一番の歌詞は「野球するならこういう具合にしやしゃんせ。投げたらこう打って、打ったらこう受けて。ランナーになったらエッサッサ。アウト、セーフ、ヨヨイノヨイ。じゃんけんぽん。（あいこでホイ）。ヘボノケ、ヘボノケ、オカワリコイ。」歌詞は4番まであり振付も存在する。



【図43 本家野球拳全国大会（愛媛県松山市、2007年4月、筆者撮影）】

#### (4) <sup>やすき けん</sup>安来拳

島根県安来市に伝わる酒席の拳。まず島根県民謡の安来節を歌う。終わった後に狐拳を打つ。2回連続して勝つと勝ちとなる。細かく解説すると、歌い終えた後、一拍おいて「（拍手）はいサー、（拍手）はいドン、きたーこーらーサー（拍手2回）」と囃す。最初の「サー」で両者狐を出す。次の「ドン」で拳を打つ。「きたーこーらーサー」以下を繰り返し一方が2連勝するまで行う。2連勝したら勝ちである。大正十一年に刊行された華城山人『正調安来節の唄ひ方 踊り方と拳の打方』（文耕堂）という本に安来拳の打ち方が載っていることから、それ以前に考案されたものであることがわかる。宴席では歌や踊りの後に拳を打つ遊びが良く行われたので、この地方では地元の民謡である安来節に合わせた拳が考案され行われてきたのだろう。

安来拳は1990年代までは保存会があって行われていたようであるが、会場として使わ



れていた安来市の公民館に連絡を取ったところ、代表者が亡くなったために現在には行われていないとのことであった。しかし平成二十四（2012）年一月の山陰中央新報に、

「安来節に乗ってじゃんけんするお座敷遊戯『安来拳』を再び広め、後世に残していこうと、出雲市斐川町の住民でつくる保存会『おいでた会』のメンバーが、地元の文化祭で披露したり、自由参加の練習会を毎月開いたりして普及に努めている。」という記事が掲載された。細々ではあるが継承されている模様である。

#### (5) 球磨拳

熊本県人吉市とその周辺の町村で行われている拳。先に述べた大坂拳の遊び方をする。手で0から5の数字を同時に示し、一つ差の場合に多い方が勝ちとなる。また0は5に勝つ。差が二以上の場合や同じ場合は無勝負、いわゆるあいことなる。

球磨拳は「ひい、ふう、さん」の掛け声で始め、一秒に一回程度の早さで続けて打ち、連続二勝して一本の勝ちとなる。団体戦は五人ずつの対抗戦で、中央に十本の棒を置き、両者で十勝したところで一方の組が一人ずつ席を移動し、一人の人間が相手側五人全員と勝負を行う。合計二百五十本を取り合うことになり、総数の多い方が勝ちとなる。個人戦は「ぎり三本のとりはぎ」というルールで行われる。これは中央に三本の棒を置き、一人が三本すべて取ると勝ちとなる。中央に棒が無くなった場合、その時負けた者は取っていた棒を中央に出さなければならない。そしてまた続けるのである。

人吉市や球磨郡の多良木町や山江村には球磨拳保存会があり、祭礼の中などで大会が開催されている。多良木町では無形民俗文化財に指定されており、平成二十四（2012）年より世界大会と銘打った大会を開催している。

江戸時代に相良藩の下級武士たちによって打たれたと言う説があるが、ここで始まったものではなく、大坂拳と言う名称の示すようにより広い地域で遊ばれていたものと考



【図44 球磨拳大会の新聞記事（左：熊本日日新聞、右：西日本新聞 平成二十五（2013）年十月二十日）】

えられる。それが時代の変化で次第に姿を消していき、結果的に人吉市と周辺に狭まって言ったものであろう。人吉市には江戸時代にもっと広い地域で遊ばれていたと考えられる「うんすんかるた」という札の遊戯が残っている。このかるたが残っている理由として、盆地のため新しい情報が入らなかったことや相良藩の藩主が遊戯に寛容であったことなどが考えられるが、球磨拳が残ったのも同様の理由であったと考えられる。

(6) 津軽拳

青森県地方で打たれていた拳。手を握るニッコ、人差し指を一本出すヤリ、手を開くヘラの3種でニッコはヘラに勝ち、ヘラはヤリに勝ち、ヤリはニッコに勝つ。ニッコがじゃんけんのグー、ヘラがパーと同じであり、ヤリがチョキに似ているため、津軽拳はじゃんけんと逆に見える。そのように書いてある資料もあるが、逆なのではなく意味合いが異なるのである。ニッコは握り飯で農民を、ヤリは槍で武士、ヘラは杓で公家を表している。

(7) ブサとサミ

沖縄や奄美諸島で打たれていた拳。その名称と内容は下記のように資料により異なっている。

「サミは相手の掌中にある数を言い当てる競技。ブーサーというのは親指・人差し指・小指を使い、その勝負の規則で争う娯楽競技である。」（源武雄『日本の民俗47「沖縄」』第一法規出版、昭四十七（1972）年）

「長崎拳（さみ） 長崎の本拳に同じ。虫拳（ぶーさー）親指、人さし指、小指の三すくみ。」（小野重郎「本拳・なんこ拳・与論ケンボウ」『鹿児島民俗69号』鹿児島民俗学会、昭和五十四（1979）年）

「（奄美）大島本島にはブサという拳遊びがある。親指は人差し指に、人差し指は小指に、小指は親指に勝つ。『サミ遊び』はサーミィとかシャミといったりする。親指、人さし指、小指で三すくみ。この他にサメといって五指で行うものがあつた。五指のうち何本かを相手と同時に出して、相手の出す数と自分の出す数をいいあてる。」（赤穂蔽也『再考・じゃんけんぽん』近代文芸社、平成十二（2000）年）

「三指拳（ブサ）と五指拳（サメ） ブサは（中略）親指と人差し指と小指の三本の指を使い、親指が人差し指に勝ち、人差し指は小指に勝ち、小指は親指に勝つ。五指

拳（サメ）は（中略）五本の指の何本かを相手と同時に繰り出し、双方の合計数を言い当てるルール。」（日高旺『黒潮の文化史』南方新社、平成十七（2005）年）

「サミあそび 親指は人差し指に、人差し指は小指に、小指は親指に勝つ。与論では親指は「木」、人差し指は「鳥」、小指は「虫」の意味づけを教えて頂いた。」（日高良廣、前原隆鋼『奄美のわらべ歌と遊び』南方新社、平成十八（2006）年）

本拳のような同時当て物拳と、虫拳のような3すくみ拳の2種類が存在していたことがわかる。名称と説が不揃いであるのは、ブサもサミも単に拳遊戯の意味で用いられており、時代や人によって逆になったりしたものであろう。

残念ながら、津軽拳とサミ・ブサは現在遊ばれている様子はない。野球拳、安来拳、球磨拳は保存会があり、絶やさないための活動が行われている。

#### (8) 鹿拳

指一本を出す3すくみ拳。「しかしかつのなんぼん」のかけ声で、指を1本か2本か3本出す。1本は親指、2本は親指と人差し指、3本は親指と人差し指と中指。3本は2本に勝ち、2本は1本に勝ち、1本は3本に勝つ。三原幸久『じゃんけんとじゃんけん歌』によれば山形県最上郡にあり、馬跳びから派生したとのことだが詳細は不明である。

そして現在も新たな拳ゲームが生み出されている。形を変えているものはそれほどない。例えばウルトラマンジャンケンあるいはビームフラッシュやビームシュワッチと言って、ウルトラマンが光線を放つ時の腕の形3種類の3すくみで行うものがあるが、一時的なもので人口に膾炙しているとは言い難い<sup>55)</sup>。グーチョキパーのジャンケンがあまりに浸透しすぎているためと考えられるが、この当時もそのような状態だったのではないだろうか。つまりじゃんけんが一般化するまでは狐拳がすくみ拳の中でも突出して一般的だったためと考えられる。それに伴い競技としての拳も本拳から藤八拳が主流となって行ったがこれは次章で述べる。

## 第6章 藤八拳（とうはちけん）

### 1. 藤八拳とは

拳には酒席で行われる余興的な遊びとしてのものと、勝敗に重きを置く競技的なものがあったわけだが、幕末から第二次世界大戦前まで後者として隆盛を誇ったのが藤八拳である。その登場は嘉永年間と思われるが、はっきりとした証拠はない。藤八拳は狐拳を用いる拳であり、二人で向き合い狐拳を連続して打ち、続けて三回勝った方が勝ちとなる。

江戸時代の史料で藤八拳の遊び方が出ているものはない。狐拳を理解できれば後はそれを続けるだけなので特に解説書などは作られなかったものであろう。遊び方が載っているもので現在発見されている最も古い書籍は明治二十五（1892）年の『秘芸の魁 拳独稽古』で、そこには、

「最初手を合し膝の上に置き手を三ツ打ちて直に甲乙共に○庄屋○狐○てつぼう○何になり共一ツを打ち出し一拳勝てば拳言「一ツ」と云ふ声を発し直に又庄屋○狐○てつぼう○三ツのうち一ツを打出し甲なり乙なり勝てば「二ツ」と云ふ声を発し○又三ツの内を打出し甲なり乙なり勝てば拳言「三ツ」といふ声を発し、甲乙共に同じ打方の時は拳言「アイコ」と云ふ声を発すなり。此拳は三べんつゞきて勝は取りとす。」<sup>56)</sup>

と少々面倒な説明がされている。酒席の遊びを集めた『是丈は心得おくべし』（大正十年）でも、

「打ち方は狐拳と同じ、矢張庄屋と鉄砲と狐の個の三種で勝負を決する。たゞ此方は三度続けて勝った方を勝ちとするので、その一拳毎に掛け声は一をトツ、二をタツ或は二、三をサン或はシメ或はドンといふ。又、一を松、二を竹、三を梅などともいふ。」<sup>57)</sup>となっている。その他明治大正期の遊戯の本もほぼ同様でそれほど詳しい解説はなく、三連勝で勝ちとなることと勝ったときに声を出すことが重要視されている。藤八拳の三回連続というのは途中で引き分けを挟んではならず、二回連続して勝っても次があいこ（引き分け）であれば、また一からとなるのである。

現在の藤八拳は、狐拳を一分間に60～80回という速さで続けて打つ。三回続けて勝ったとき、動作を止めて勝ちを申告しなければならないために自分の勝ち数を把握していないと勝つことができない。そのため経験を積まないとなかなか勝てないのである。そのために競技性が非常に高いのである。本拳が酒席の拳と競技の拳と両方あったように

狐拳も両方のものが存在したのである。狐拳を競技化したものが藤八拳と呼ばれるようになったのか、競技化した狐拳があり、それが藤八拳と呼ばれるようになったのか、発生から考察していく。また藤八拳と言う名称の語源は複数の説が存在するが、これらを検証する。

## 2．藤八拳の発生

### (1) 名称の由来

藤八拳の名称の根拠には、下記のように複数の説がある。

- ① 藤八五文売りの売り声からついたという説
- ② 吉原の幫間藤八が考案したという説
- ③ 殿様の鷹狩りに共をした家臣が考案したという説
- ④ 曾呂利新左衛門発明したという説
- ⑤ 朝鮮の遊戯が伝わったという説

#### ① 藤八五文の売り声説

藤八五文売りとは、文化年間（1804～1818）の末頃に江戸に現れた薬売りである。2人一組で売り歩いたそうだが、『川柳江戸名物』によれば、

「二人の男が両側に分れ、一人が藤八と呼ばば一人が五文と応じ、次に兩人相面して奇妙と合唱す」<sup>58)</sup>

という売り方をしたとのことである。文政八（1825）年の藤八五文売りの記述が複数の史料に載っている。

「四月の始より、藤八五文奇妙と呼で、癩の薬を<sup>あきな</sup> 售うもの、街を歩行。」（『武江年表』）

「四月初より藤八五文と呼て積聚の薬を売もの、三度飛脚の菅笠きて胸当して歩行、」（『ききのまにまに』）

「文政八年夏より、藤八五文奇妙といふて江戸中を売歩行。三度笠をかぶり、小さき風呂敷づつみを背負ひ、脚絆をはき、旅人のごとし。諸病によしといふ。たしかならず。中村座にて、松本幸四郎此役を勤る程流行せり。」（『続飛鳥川』）

「藤八五文丸追日流行、種々の器物模様に之をやつし用ふ。此程築地浜町を過れば、吉原・深川の通船を始、遊妓の三絃多くは之を歌ふ、一時の流行かくのごとく甚し。

そもそも

抑 藤八五文丸の由来を尋るに、鎮西肥前国長崎平戸町綿屋藤八と申者、古くこの薬を製し、第一腎精を増し、脾胃を調へ、氣を開き、食を勧め、其外効能かぞへがたしといふ。朝鮮弘慶子といへども、此盛なるにはしかずと申あへり。」（『道聴塗説』）

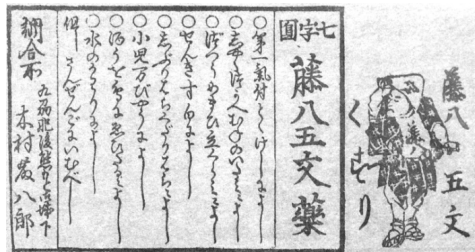
「又近来市中に一種の売薬ありて、道を行きながら十八五文と呼び、又しばしして奇妙と呼ぶ。是は丸薬の数十八を錢五文に換へ、その効験あるを自賞して奇妙と云なり。卑賤の輩多くこれを求て服用するに、果たして効あり。故に今都下盛に流行す。」（『甲子夜話 第六十九巻』）

「此節（正月）専ら流行致し候藤八五文からんと云葉売出るなり、形菅笠に蛇の目の紋付しをかむり、木綿羽織、同むねかけ、脚半にて歩行也、但し壱丁程行、くるりと廻り、からんと云、扇を開く也。扇・胸懸・はおり共、蛇の目、柳ごりを背負、又藤八五文の薬は、藤八五もん奇妙と云て歩行也。」（『藤岡屋日記 第一巻』）

以上のように、藤八五文薬が最初に江戸に現れたのは文化年間の末頃のようなだが、文政八年四月に大いに脚光を浴びている。理由は上記の史料に見えるように変わった装束と売り声であろう。複数の史料にあるところから、この特殊な売り方をしたのは江戸に来た文化年間ではなく文政八年四月からと考えられる。



【図45 藤八五文売（『近世商売狂歌合』）】



【図46 藤八五文売<sup>59)</sup>（『江戸のくすりや』）】

同年七月二十六日より、中村座の狂言の二番目に「東海道四谷怪談」が上演され、序幕で松本幸四郎と松本染五郎がこの藤八五文売りに扮し当たりを取った。採り上げた理由は町で評判だったからであろう。脚本には次のようなシーンがある。

「  
花道から向ふより、直助・藤八、藤八五文薬売りの形にて、呼びながら  
出て来り  
きた



(中略)

藤八 『サア、行くベエ／＼。 藤八五文』

直助 『奇妙』

ト呼びながら舞台へ来る。」<sup>60)</sup>

藤八拳の試合は狐拳を連続して打ち、三回続けて勝った場合に一勝ということになっている。掛け声として、一回勝った場合にイチ、続けて二回勝った場合には二、三回目を勝ったらサン、というように発声し、自分の勝ちを確認するのである。これは数詞に限らず 3 つひとまとまりのものであれば何でも良かったと思われる。そこで「藤八」「五文」「奇妙」という三拍子の藤八五文売りの売り声を採り入れたものと考えられる。

明治期の新聞に下記のような記事がある。

「今より八九十年前『藤八五文奇妙』と呼びつつ市中を流したる葉売りありしが、其頃佃島の獵師が吉原の大漁の酒宴を張りし時件の葉売りの呼び声を耳にし、図らず拳の節に合わせて藤八五文奇妙と懸声をなせしより<sup>これ</sup>這は面白しとて追々市中に伝はりしなり。」  
(読売新聞 明治三十九(1906)年十月二十八日)

おそらくは当時の藤八拳の競技者が語ったものと思われるが、このあたりが真相に近いのではないだろうか。

## ② 吉原の幫間藤八説

この説は資料がほとんどなく次のものぐらいである。

酒井欣は『日本遊戯史』の「藤八拳」の項で「吉原の幫間藤八によって創案されたものの」<sup>61)</sup>と断定しているが根拠は示されていない。

他には、

「一説には、本拳が全盛だった頃、吉原のたいこもち藤八の考案だとも言われ」(「三代目善平の生活と意見」『たいこもち(幫間)の生活』)

「一説には吉原の幫間藤八より起こるというが」(「藤八拳の土俵」『道具が語る生活史』)

というように説はあっても「らしい」という伝聞や推量だけのものである。藤八拳は座敷の遊戯であり、藤八は人間の名前である。そんなところから想像して作り上げられた説の感が強い。桜川藤八と屋号がついている説もある<sup>62)</sup>が、実際に藤八拳をやっている

た帮間の桜川善平<sup>63)</sup>から考えられた説であろう。

③ 殿様の鷹狩りに伴い生まれたという説

殿様（ある説では徳川秀忠、ある説では徳川吉宗）が鷹狩りに来る。それは口実で実は庄屋の娘に会いに来る、その娘は実は狐で、それを鉄砲で撃つ...と言う話をしていた町人が役人に見とがめられ、言い逃れのために、今のは手真似をする遊びであると主張したことにより生まれた、という説（『色模様 江戸から東京へ』）。またある説では、町人でなく將軍の従者が行っていたとなっている（『東八拳道』）。話としては面白いが、これでは狐拳の誕生説であって藤八拳の誕生説ではない。

④ 曾呂利新左衛門が考案したという説

大槻如電（弘化二（1845）年～昭和六（1931））が信州上田の飯島嬉笑氏の寄稿として、

「秀吉の朝鮮出兵に伴い、九州名護屋（現在の佐賀県唐津市）に出兵した兵を慰めるために高台寺の住職端翁と曾呂利新左衛門が考案した。」（『風俗画報「拳の事」』）と書いている。

「抑々此拳の濫觴は文禄年中豊臣秀吉公朝鮮国を征伐したまふ砌り、肥前国名護屋の在陣七ヶ年に及び（中略）或時京師東山なる高台寺の往侶端翁和尚、御陣中の御見舞いとして名護屋に下向、御目見得の上種々御物語申上る中に蛇と蛙と蛞蝓の三縮に成る事は伝説にも所見ありなど談<sup>だんべい</sup>。（中略）曾呂利新左衛門<sup>かたへぎ</sup>傍聞して居たりしが、何か新しき御慰みをと専ら工風の折なれば、是に思ひよせて莊官と狐と山獺師と三灘<sup>さんすくみ</sup>になる事を拳に趣向し、其仕方を御前においてご覧に入れし、法橋紹巴御側にあつて是に三ツ拍子を添える事をなしたり。」（読売新聞 明治十四（1881）年十月二十九日。読点は筆者）

やはり狐拳の誕生説であるが類似の説は他の遊戯にもあり信憑性は低い。例えば鹿児島県始良市加治木町には「蜘蛛合戦」というコガネグモを戦わせる行事があるが、この由来は、

「いまから四百年前、島津義弘が朝鮮役の陣中で兵士たちの無聊を高めかたがたその士気を鼓舞するため、女郎グモ（コガネグモ科の節足動物）を集めて闘争させた」<sup>64)</sup>となっている。

このように有名人を用いるのは話を面白くするためや権威付けをするためによく用いられる話である。時期も合っておらず創作と考えて良いだろう。

#### ⑤ 朝鮮の遊戯が伝わったという説

これは朝鮮半島に同様の遊戯があるからだそうである（大槻如電「拳の話」『風俗画報』）。実は逆で日本の拳が朝鮮半島に伝わったものという説の方が有力である。

以上を比較した結果、上記の理由の中では、藤八五文売り説が最も妥当と考えられる。すでに狐拳は存在しており、三本勝負のとき、勝ったとき発する言葉として、当時流行していた藤八五文売りの「藤八」「五文」「奇妙」が採用され、その呼称を用いる拳を藤八拳と呼んだというのが最も理由として合理的であろう。

#### (2) 藤八拳の創始者

幫間藤八や曾呂利新左衛門以外にも創始者と言われる者がいる。

##### ① 鷲尾法眼

『東八拳道』には、

「関東における東八拳は、鷲尾法眼が初代東川舎旭斎となって大いに拳戯を広めてから、非常に隆盛となり現在宗家として、八代目旭斎に至っている」<sup>65)</sup>

とある。しかし、嘉永五年、六年の藤八拳番付に東川舎という屋号はなく、東川舎の屋号が登場するのは明治になってからである。江戸の番付に多数の人名が記されていることから、すでに江戸では藤八拳は広まっているのは明らかで、この説も事実ではない。東川舎という一門の人間が、自分の一門が東京（江戸）で最も由緒があるように見せるために作り上げた創作であろう。

##### ② 春の家草○

藤八拳を広めた人物として、春の家草<sup>くさまる</sup>○が挙げられる。

「二世龍王鬼翁の談話 ▲拳連の流行 その後春の家草丸と呼ぶ名人出て狐拳を改めて藤八拳となし一派をたて旗本仲間に同好者多く、弘化嘉永の頃には、東連、英蓮を始め、旭、東昇、小桜、武蔵野などいふ大連数多起り非常の流行を来したり。」（読売新聞 明治三十九（1906）年十月二十八日）

「拳の流行は久しいことであったが、支那伝来の本拳のほか、文化・文政には、虫拳・石拳・狐拳・虎拳を派生していた。それがあたかもこの頃（弘化四（1847）年頃）は、春の家草丸によって、狐拳が藤八拳と改称され、ようやく流行し始め、後には拳と言えば、狐拳・藤八拳のことに思われるようになる、その機先なのだ。」（三田村鳶魚「伝統した明治初年のトテツル拳」『三田村鳶魚全集 第十九巻』）<sup>6)</sup>

「嘉永・安政の頃よりは、旗本御家人の間に盛に行はれしが、其頃春の家草丸と云ふ者始めて、連中を作りしより、東連、龍王連、旭連、東昇連、小桜連、英連など拳連相ついで起り、藤八拳のみ広く世に行はれ、他の拳は暫く廃るに至りぬ。」（中川重理『藤八拳独習』）

「嘉永六年の「元祖藤八拳相撲」の武蔵野連の番付に、東方の関脇として二代目「春の家草○」という拳士が挙げられているが、この人が狐拳を改め、藤八拳を造った「春の家草丸」の後継者であった。」（セップ・リンハルト『拳の文化史』）

嘉永六年の藤八拳番付（図48）には東の関脇として「二代目 春の家草○」の文字が見える。しかし、初代の草○が狐拳を藤八拳に改称したという記録は見つかっていない。二世龍王鬼翁や三田村鳶魚らがどのような資料を元にそう述べているのかは掴めて

Figure 47 is a historical Japanese ranking list (banpai) for 'Futenpachuan' (藤八拳) from the year Kan'ei Eigo 5 (1854). The list is organized into columns with names and ranks. The title '藤八拳相撲' is prominent at the top. The names are written in kanji, and the list includes various ranks and names of participants.

【図47 藤八拳番付（一文字連、嘉永五年）】

Figure 48 is a historical Japanese ranking list (banpai) for 'Futenpachuan' (藤八拳) from the year Kan'ei Eigo 6 (1855). The list is organized into columns with names and ranks. The title '藤八拳相撲' is prominent at the top. The names are written in kanji, and the list includes various ranks and names of participants.

【図48 藤八拳番付（武蔵野連、嘉永六年）】

おらず、この説もにわかには信用し難い。

### (3) 藤八拳の成立時期

藤八拳も本拳同様に当初は酒席の遊戯であって、後に競技としても行われるようになったと考えられる。名前が付いたと考えられるのは藤八五文売りが評判を博した文政八（1825）年以降であろう。

藤八五文の流行以前から競技の狐拳はあったのだろうか。もしある程度確立したものがあったのであれば何らかの名称を持っており、藤八拳という名前にはならなかったと考えられる。藤八五文以前の狐拳は、現在のじゃんけんのように単純に物ごとを決める拳や酒席の拳であったと考えられる。ただ本拳が五本勝負ということが一般的に行われていたように、狐拳も本格的に勝敗を争うときは三本勝負が行われていたと考えられる。数字を言う言い方には『是丈は心得おくべし』にあるように様々なものがあり、それを「藤八」「五文」「奇妙」にしたのが藤八拳と呼ばれたと考えられる。

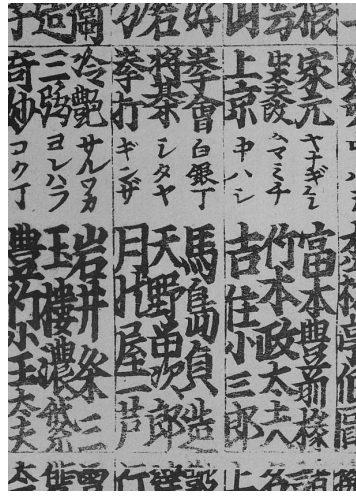
しかし、藤八五文売りが評判となった文政八（1825）年直後に藤八拳のみが独立して流行したとは考えにくい。というのは、この後暫く藤八拳の資料は見当たらないからである。さらに、前章で述べたように弘化四（1847）年にはとてつる拳が流行し、その後は所作拳が続け様に登場する。

発見されている最も古い藤八拳の番付は嘉永五年と嘉永六年の物である。嘉永五（1852）年は一文字連、嘉永六（1853）年のものは武蔵野連という異なる団体のもので、それぞれ約200人以上の名前が現役の拳士として掲載されている。下方には他団体の者と思われる拳士の名が載っているが、一文字連の番付には武蔵野連の番付の大年寄である武蔵野狐翁と武蔵野狐玉、世話人である武蔵野狐ヨシの名が載っており、武蔵野連の番付には一文字連の勸進元である一文字翁斎の名がある。この時期にはすでにいくつかの団体があって相当数の拳士がいるので藤八拳が競技化してかなりの年月が経過していたと考えられる。

おそらく、文政八（1825）年に藤八五文売りの人気が出、その人気が残っているうちに三本勝負の狐拳の数字の言い方を「藤八」「五文」「奇妙」にしたものが生まれ、これを藤八拳という名で呼んだもので、競技としての狐拳はそれ以前からあったものと考えられる。そして遊びの拳である拳酒とは別個に存続して行ったと考えられる。

セップ・リンハルト氏は『高名時花・三福対』（嘉永三（1850）年）という著名人を





【図49 高名時花三福対（部分）】

三人一組で囲った番付の中に「拳会 白銀丁 馬島貞造、将棋 シタヤ 天野留次郎、打拳 ギンザ 月廼家一蘆」とあることについて、

「「拳会」と「拳打」という二つの遊びは、やはり「本拳」と「狐拳」を意味している。」<sup>67)</sup>

と書いている。嘉永五年と嘉永七年の東都拳相撲番付を見ると、双方の番付に勧進元として月廼家一蘆という名前が見える。蘆と芦は共に植物のアシであり同一人物と考えられる。そしてこの番付が本拳の番付であると考えられるところから、月廼家一蘆は本拳の拳士として名をはせた人物と考えられる。またこの少し前の天保十（1839）年、天保十二（1841）年、弘化四（1847）年五月、弘化四年十一月の本拳の番付に稽古場所として本銀町三丁目馬島亭とあるところから、馬島貞造は拳会の席亭として高名な人物だったと考えられる。つまり「拳会」は「拳を行う場所」で「拳打」は「拳を打つ人」と解釈すべきではないかと考えられる。藤八拳の関係者が載っていないことから、この時点ではまだ本拳の方が優勢であったと言えるだろう。またリンハルト氏は、

「狐拳に藤八の呼び声を入れ、狐拳そのものも新しく藤八拳と名付けた時点は、やはり弘化嘉永の頃であったと思われる」<sup>68)</sup>

と書いているが、藤八五文売の掛け声が流行したのはそれほど長い期間とは思えない。そして流行が廃れてからその名前を採り入れるとも考えにくい。三本勝負の狐拳を藤八拳と呼ぶようになったのは、文政八年からそう遠くないうちではなかったかと考えられ



る。ただ、暫くは競技の拳は本拳が主流で藤八拳はさほど人気が無かったのではないだろうか。狐拳が大流行を見せるのは弘化四（1847）年、「笑門俄七福」でとてつる拳が大流行してからである。嘉永五年（1852）の藤八拳番付は一文字連という一つの団体のものである。弘化四（1847）年のとてつる拳の大流行を契機として競技の拳も狐拳を用いる藤八拳が大きく流行し、この五年の間に藤八拳人口が大きく増えたと考えられる。

### 3．藤八拳の変遷

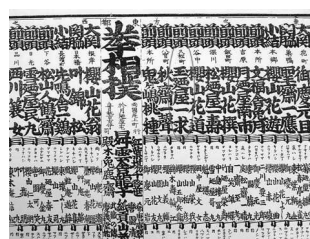
#### (1) 幕末の藤八拳

競技の本拳の番付もこの前後発見されており、藤八拳とは並行して存在していた。したがって競技の本拳を行っていた者がそのまま藤八拳に移行したのではないことが分かる。もちろん、両方を行った人間も存在したと考えられる。

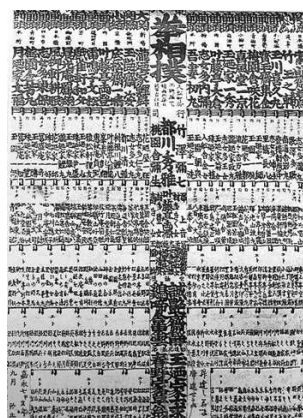
例えば、嘉永五（1852）年の東都拳相撲番付で西前頭十三枚目、嘉永七（1854）年四月の東都拳相撲番付で東前頭六枚目に「玉廼家一求」という名が見える。嘉永七年九月の藤八拳の番付では勤進元に同じ人物の名前が見える。その後、本拳の番付に玉廼家の屋号は見えない。両者は同じ人物と考えて問題ないだろう。番付の名前はすべて拳名、相撲で言う四股名である。相撲と同様であれば師匠から拳名を貰うのだから、本拳での拳名と藤八拳での拳名は異なるはずである。玉廼家一求は本拳をやめて一門ごと藤



【図50 東都拳相撲番付  
（嘉永五年）】



【図51 東都拳相撲番付  
（嘉永七年四月）】



【図52 東八拳相撲番付  
（嘉永七年九月）】

※いずれも丸印は筆者

八拳に移り、自分は勸進元を引き受けたと考えられる。明治九（1876）年と十年の藤八拳番付には大年寄に玉廻家翁一求の名が見えるが、これも同じ人物と考えて良いだろう。

玉廻家一求以外にも拳番付での名前は異なるが同じ人物がいた可能性はあると考えられる。藤八拳番付では玉廻家一求は勸進元である。本拳の打ち手が藤八拳の元締となったということで、競技の藤八拳は本拳とは別な新たなグループが始めたのではなく、本拳から移行してその中心となった者がいたのである。競技の藤八拳が急速に広まったのは、こういった者たちが試合の行い方や、番付の作り方など本拳を真似て行ったためであろう。

幕末になると、本拳の史料はほとんど見当たらなくなる。理由の一つとして天保十五（1844）年に出された拳稽古所の差し止めの触書が考えられる。それ以降、本拳の情報はほとんどなく、これを契機として衰退したと考えられる。しかし、この時藤八拳も競技化していたわけで、本拳だけが消えるのは不自然である。大きな理由は藤八拳と本拳の性質が異なることだと考えられる。つまり本拳より狐拳の方が面白かったということである。本拳は出す数の合計は0から10までが有り得、言う数字は一つであるから簡単に勝負が決まらない。また、読みの要素があるとはいえ、運の要素の大きいゲームである。藤八拳は引き分けが少なく、技術や動体視力の要素で強くなることができる。同じ拳を打つなら藤八拳の方が面白い。こうして本拳の競技者も藤八拳に移っていったというのが本拳の衰退原因であろう。

明治維新直前には藤八拳が廃れたような史料が見受けられる。

『巷街贅説』（鷹哉翁著、発刊年不詳）には安政二（1855）～三年頃の世の中について「廃り物茶の湯楊弓蹴鞠連 拳の稽古の声も聞こえず」<sup>69)</sup>という歌が詠まれている。

また成島柳北（天保八（1837）年～明治十七（1884）年）が幕末の花柳界を描いた戯作『柳橋新誌』（安政六（1859）年）には、

「曩時の妓、往々諸技に巧みなりと。（中略）拇戦の若きは、則ち一人の巧みならざるなし。今は乃ち否ず、僅かに三絃を撫するのみ。拇戦も亦皆極めて拙し。全く解さざる者あるに至る。而して近歳の拳戯、藤八・来々・三拍の手コイコイ ミツウチの若きも、亦抗対すべからざる者なしと云ふ。（昔の芸妓は様々な芸ができた。本拳に巧みで無い者は一人もいなかった。今はそうではなく、三味線を弾くのみである。拳も下手である。全く理解できない者もいる。最近の拳である藤八拳、来い来い拳、三拍拳も客が対抗でき

ない程上手な者はいない」<sup>70)</sup>

とある。本拳は大きく廃れ、藤八拳などの拳も花柳界では行われなくなっていたようである。ちなみに来い来い拳は、拳を打って勝ち負けが決まる度に、勝った方は相手に向かい「来い来い来い」と招くような動作をし、負けた方は平身低頭して「へいへいへい」という拳、三拍拳は三回手拍子を打ってから拳を打つ形のもので推察される。狐拳を連続して打つやり方の一種であるが、同様のものの中で藤八拳が最も流行したようである。また文久二（1862）年の河竹黙阿弥（文化十三（1816）年～明治二十六（1893）年）の歌舞伎狂言『あおとぞうしはなのにしき え青砥稿花紅彩画』には、

「おやまゝ、拳を打って。流行に遅れた藤八拳でさア。」

というセリふがある。

しかし、これらを以て拳が廃れたとは考えにくい。安政四（1857）年の同じ黙阿弥の歌舞伎狂言『ねずみ こもんはるのしんがた鼠小紋春君新形』には「もし、この間狐拳がございましたさうだが、私は江戸へいきました。惜しいことを致しました。」というセリフがある。行われなくなったわけではなく、大流行が納まり一般的な遊戯として位置づいたということではないだろうか。

三浦梧楼著『明治反骨中将一代記』では次のように、戊辰戦争の最中の慶応四（1868）年に会津と長州の兵隊が川を挟んで藤八拳を打っていた記述がある。

「此の興ある話に吾輩も往って見たのであるが、此の方から「会津さん」と呼ぶと、彼方からも「ヤア長州君」と言って出てきた。「サア一拳遣らう」と互いに藤八拳を闘わすなど、実に暢気なものである」<sup>71)</sup>

会津と長州の双方の兵士が打ち方を知っていたわけであり、広く全国的に一般化していたと考えられる。

明治四十（1907）年の『演芸画報』には、

「花廼家寿翁事片田長次郎氏は同姓町次郎氏の二男にして幼名を格馬と称す。幼時より藤八拳を好み稍長ずるに及び商業上尾張名古屋に赴きたるが時に同地に藤八拳盛んに流行し中にも旧藩士加藤文吾氏最も其の技に長ず。由て同氏に従い学び其妙を得たり。明治二年東京に歸りたるが東京も亦藤八拳非常の流行にて各区に会を開き流名を附し格流特色を出だして競走の姿なり。」<sup>72)</sup>

とある。「盛んに流行」は誇張かもしれないが明治初期にも廃れていないことがわかる。

明治三十八（1905）年の読売新聞にも、「龍王連の祖は旧田安藩士金子増次郎と云ふ人にて号を鬼丸と称したるが維新の頃鬼翁と改め鬼丸は門人柿沼長豊氏に譲り...」（読売 明治三十八年十月二十八日）とあるがこれは柿沼長豊氏本人の談話と言うことでかなり信憑性の高いものと考えられる。明治維新前後、すでに藤八拳は全国的に広まっていたのである。

## （2）明治の藤八拳

明治になると新聞が発行されるようになるが、当初、藤八拳はかなりひどい扱いを受けている。

### ① 藤八拳の新聞記事

明治以降、藤八拳は数多く新聞などの記事で見ることができる。客観的な記事もあるが、多くは批判的である。

「府下飯田町二丁目河岸松ノ湯楼上ニ於テ、本日ヨリ相始メ、毎月一六ノ日ヲ定メ、東八拳ノ会ヲ為シ、天地人ノ三才ニ品ヲ定メ、三才以上ノ者ヘ八景物ヲ出セルトナリ。又湯島男阪角待合茶屋ニ於テモ同様ノ催シアル由ナリ。」（読売新聞 明治七（1874）年七月六日）

「神田紺屋町37番地の差配人橋本清吉といふものは毎晩一人まへ五錢づつにて当八けんの稽古をいたし男も女も御弟子となつて中には親が提灯を持って子供の送りをして当八をおぼえさせなかなか盛りで有りますが開化の世の中こんなものか。」（読売新聞 明治八（1875）年四月十四日）

「牛込神楽町二丁目に東八拳一六座料一錢五厘云々世話人誰と云う看板が出ておりますが毎度いふ通り東八拳は何のためになりましょう。怠惰<sup>なまけ</sup>ものを殖<sup>ふや</sup>す種を蒔かれるには困りきります。」（読売新聞 明治八（1875）年六月二十七日）

「或る人が近頃東京中いづれを聞ても三味線の稽古やまた踊りの稽古をする女の子が少なくなつて御師匠さんたちは此分でまいると段々困る...若い人が東八拳の稽古をすることはますます盛りになり大坂などにも大流行で有るが、今の子供はさんざん<sup>り</sup>巧<sup>こう</sup>になり今の大人はついつい馬鹿になるわけかしらんと話しました。」（読売新聞 明治八（1875）年九月二日）

「本所相生町の何竹とかいふ待合茶屋にて先月二十八日に藤八けんの会がありました

が、大そうな事で弁当が二百人まへも出まして番付ができるやら二三日も家業を休んで騒いだおりこうがあったとさ。」(読売新聞 明治八(1875)年十月二日)

「府下雑報 藤八拳の角力も<sup>いよいよ</sup>彌 繁昌する様子にて芝東連の鶴斎といふ人は此度金モールにて腕の廻しを誂へ代価は金七円とヤ升且又芝神田四ツ谷麹町銀座鍋町辺の藤八拳打寄り来四月浅草寺開帳迄に二百円余の入費をかけて東西番附の額面を奉納するとて当今相談最中との風聞。」(郵便報知 明治八(1875)年十月二十八日)

「府下雑報 東八拳の流行はイヤハヤ大変なもので区々一般に党を組み社を結び浅草きつて吉原山谷向島辺多く芸好などの手合せ角力にて此会の分? 所々に集合し揃いの晴れ着拳まわしの類に花美を競い野草楽連中の群れ夥しき故に此程方々の場所で<sup>むだ</sup>遊惰な寄会はなりませぬと参集を止められましたと申すこと。誤問奇妙の先生も一<sup>や</sup>拳遣られました。」(郵便報知 明治八(1875)年十一月六日)「誤問奇妙」は藤八五文の薬売りの洒落である。

「近ごろは同権とか自主の権とか民権とかいふ事が流行するゆゑ白痴連中が何でも拳とさへいへば文明開化だと思ひ違ひ浅草、神田、芝、赤坂、本所、深川。どこへ行っても藤八拳が流行で甚だしいのは障子に「藤八東れん」などと書き出し中は恐ろしい剣まくで今日は試験とか明日は真剣とか世間も憚らず負ければ剣もほろろに扱われ犬につんつん行司は軍配団扇を拵へて出かけ其騒ぎといったら実に正気とは思われませんが、あんな愚げた事を好むうちはどうして／＼民権どころか四神剣でもかついで往来でけんつくでも食ふのが関の山で有りましよう。」(読売新聞 明治九(1875)年九月十六日)。けんづくしで東八拳批判である。

特に寄書、つまり一般からの投稿覧ではかなり批判されている。

「寄書 人さんの御商法のさまたげをする訳では有りませんが、貴社の第八十号の新聞の中に神田紺屋町三十七番地の差配人橋本清吉さんといふ人が此の頃一人の<sup>おしへれう</sup>教料一夜五錢ずつとつて東八拳を教へなさとありましたがなんと高値な教料ではありませんか。」(読売新聞 明治八(1875)年五月十三日)

「寄書 或る洋学の書生さんで年の頃十七八から二十ばかりのが六人で何湯とやらの二階の<sup>をんな</sup>婦に少しぼんやりしたのと見えて毎日毎晩湯屋の二階で拳を撃って遊んばかり居りますが他の勉強な<sup>ち</sup>書生さんの妨げにもなり御自分達も修業が出来損ない世間の人にも笑われますから少<sup>ち</sup>とお慎みなすつては如何でござりますかとお告申ものは。」(読売新聞 明治九(1876)年一月二十三日)



「藤八拳では筋金が入っていると言われて番付ができれば大関にまで成り名前にも藤の字をつけ南品川後路町の糴<sup>せり</sup>呉服屋藤次郎は去年の暮れから心を改め藤八拳などは凡世の中で無用な芸だといふことを思ひ同じ一本二本の友達へも諭して此頃では同所の夜学校へ通い一心不乱に読書を勉強して居るが此人などはよい所へ目が着いたのでありまじやう。」（読売新聞 明治十一（1878）年三月十六日）

と藤八拳を止めた男を賞賛している。批判はそれだけ流行していた裏返しであろう。

もっとも明治中期には衰退していたと考えられる史料もある。

「花廻家寿翁。明治二年東京に帰る。三月、初めて花廻家と称し寿翁と改む。（中略）十七年京阪に出張するに及び指揮を門下の秀才寿輝氏に委託したるが寿輝氏亦都合にて奥州に出張するに及び指揮者を欠き久しく中絶したり。後寿翁氏京阪より帰京したるも藤八拳衰微して見る影も無かりしが、（中略）四十年一月、拳名番付を出し盛んに門下を集むるに至りたるが目下日本橋、浅草、京橋、本所、深川の各区に渡りて約千名の門下あり。」（『演芸画報 第1巻10号』（明治四十年））

明治十七（1884）年頃から明治四十（1907）年までは衰退していたということである。

東京の様々な施設や場所を網羅した『東京百事便』（明治二十四（1891）年）には「藤八拳指南所」は一軒しか載っていない。現在、明治十八年と明治四十年の藤八拳番付は見つかっているもののその間のものは発見されていない。しかし次のような新聞記事もあるため完全に絶えていたとは考えにくい。

「筆の雫 ▲毎年夏季に於いて流行する素人相撲は其筋の取締<sup>や</sup>八かましき故近来は藤八拳流行し来りたり、其競技の様子は中央に一面の碁盤を置き其隅に四本柱を設け盤上には長さ一寸許（ばかり）の檜の角木を三本置き拳手は呼び出しによりて東西に座し手首に力士の締込やうのものを巻きて技を闘はせ（中略）検査役其傍に坐して勝敗を定むるものにて角木二本を取りたるものを真の勝とすといへり。深夜まで騒ぎて近所を悩ませ又は賭けなどはすまじき事ぞ。」（東京朝日新聞 明治三十五（1902）年八月三日）

また夏目漱石（慶応三（1867）年～大正五（1916）年）が明治三十九（1906）年に発表した小説『坊っちゃん』には、「あるやつはなんこをつかむ。こっちでは拳を打っている。よつ、はつ、と夢中で両手を振る所は…」と藤八拳を打っている光景が登場する。大きな組織であった花廻家一門が衰微していたが、他の小さな団体は活動していたということであろう。東拳舎天堂の『東八拳道』には「時世が変つて明治十八年頃は東八拳



の廃れた絶頂で明治三十年頃から又ボツ／＼と拳をうつ者が出てきた。」<sup>73)</sup>と書かれている。衰退していたのは明治十八年から三十年頃と考えられる。

### (3) 明治後期から第二次大戦までの藤八拳

#### ① 睦会の誕生

明治後期になると、批判的な記事は消え、逆に大会の記事が多く見受けられる。

「酒間の遊戯として今尚流行せる藤八拳の大会を本日牛込門外琴富貴亭に開く」(読売 明治三十九(1906)年十月二十八日)

「藤八拳の番付披露会 竜王、東川、旭、二葉、其他の各藤八拳組合にては今回聯合番付を調整し明六日午後二時より牛込門外の琴富貴亭に於て番付披露大会を催す由」(読売 明治四十(1907)年一月五日)

「藤八拳大会 来る十七日京橋区南八丁堀桜橋際貸席川崎亭に於て開催。飛入勝手との事会」(読売明治四十(1907)年十一月十四日)

「藤八拳番付披露会 本月一日日本橋常盤木俱樂部に於いて、花の家元寿翁門人等後見にて、藤八拳相撲取組番付披露大会を、午後三時より催す由。」(『文芸俱樂部第14巻7号』(明治四十一年(1908)年五月一日発行))

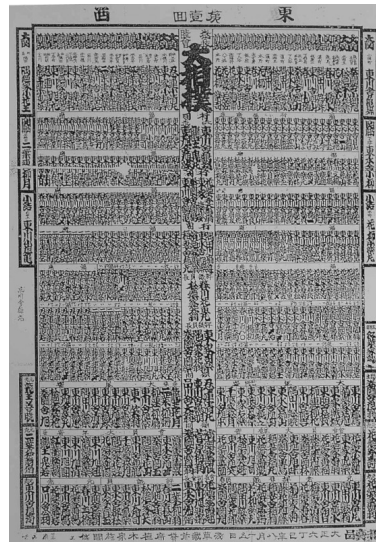
「<sup>ママ</sup>闘八拳大会 (略)花廻家一派の寿鶴が会主となり昨日午後七時より日本橋常盤木俱樂部に拳相撲番付披露の大会を催せり。(中略)目下斯界に勢力を振り居るは花廻家、東川舎、龍王の三派にして花廻家及び東川舎はいずれも千人余の門弟を有し(後略)。」(東京朝日 明治四十一年(1908)年五月二日)

「東川舎の藤八拳 明日午後五時より京橋区木挽町一丁目蒸風呂の向ふの貸席白水方に開会。会主は二代目東川舎鶴翁後見は東翁斎なり。」(東京朝日 明治四十一年(1908)年十月三十一日)

「東八拳大会 (略)一昨夜日本橋の常盤木俱樂部に催されたは東川舎派の大番付披露の大会であつた。都下及び町在の大天狗中天狗木葉天狗無慮三百余名は腕に撚をかけて折しもの降雪をものともせず永当永当と詰めかけ(後略)」(東京朝日 明治四十二年(1909)年一月十五日)

「藤八拳の追善会 藤八拳の名手故東川舎鶴翁の追善大会は同舎中の鶴翁、小旭鶴等会主となり一昨夜六時より呉服橋石輪俱樂部に開き非常の盛会なりしとぞ。」(東京朝日 明治四十二年(1909)年八月十日)

日本の拳遊戯（中）



【図53 第一回睦会番付（大正六（1917）年）】

「藤八拳大会 本日午後一時より花廻家寿輝会主にて新富座前大和屋に大会を開く。」  
（東京朝日 明治四十三（1910）年九月二十一日）

「藤八拳番付披露 藤八拳二葉連にては明日午後三時より牛込神楽坂倶楽部に於て東京王子品川の連合番付披露大会を開き市内各連の勇将連出席他流試合をなすと。」（読売 明治四十四（1911）年九月十三日）

「夏場に流行る若い衆の年中行事の東八拳大会 臍から下へだらしくちりめんや博多を巻つけて頭髪を角刈りにした連中が、氷屋の店や駄菓子屋の縁台へ斜めに腰を据えて「最初ね二ツ三ツ」「嘘よドンドン」てな調子で賑やかに遊ぶ東八拳も蚊の脛相撲や踊りの凌と共に夏場に流行る若い衆の年中行事 ▼其東八も（中略）いま東京に整然たる秩序の元に幾組もの東八会ができています。昨夜浅草仲見世の貸席いせ竹で浅草の重鎮春川舎松山の二代目披露東八会があった。 ▼会するものは二百余名（以下略）」（朝日 大正二（1913）年八月二十六日）

批判が出なくなった理由としては、新聞が客観的に情報を公表するものとなり、記事の中で自社の意見を示さなくなったためと考えられる。

ちなみに藤八拳の表記だが、番付を見ると東川舎という団体は「東八拳」という表記を用い、拳闘舎という団体は闘八拳という表記を用いている。わざと自分たちの名称に替えているのは半ば洒落っ気であり自己主張であろう。現在は東八拳という表記にして

いるが東京でやっているということを意識して使用しているそうである。

大正以降のことについて『東八拳道』には「大正の初期各派合同して拳技睦会を起し、当時相当盛大を極めた」<sup>74)</sup>、「大正六年六月十五日、拳技睦会が出来」<sup>75)</sup>と記述されているが新聞記事にはなっていない。藤八拳の世界では大きな出来事だが、世間的にはニュースではなかったということであろう。合併の理由は明らかになっていないが、ニュースにならない程に衰退してきたため危険を感じて連合したのではないかと推察される。

この後、睦会として毎年番付が発行されていたようである。また各団体でも独自に番付を発行しており、東川舎や東家の番付が残っている。いずれも「客席」という名称で他の団体の拳士の氏名を記載しており、全体像を知ることができる。

## ② 分裂と合併

昭和三年の読売新聞には、

「役員会を開き 藤八拳を統一 四月一日浜三倶楽部に十二軒の家元集まる」 旦那と鉄砲と狐の藤八拳の名取拳士が都下に約五千人居る。これが家元十二軒より成る東京拳技睦会の役員会が明後一日午後五時から日本橋浜町三丁目の浜三倶楽部に開かれ今年度の番付編成や会務改革の件が付議されるが、近来藤八拳の拳戯が勝負のみに走った結果墮落に墮落を重ね遂に昔からの純正な態度を忘れ、ともすれば、所謂軟拳と称する邪道に陥り一般藤八拳趣味を没却する傾向があるので睦会では此の悪傾向を矯正する為に各家元は拳技に関する一定の法規協議しこれによって拳技の基本を確立するはずである。尚目下右の睦会から分離中の一派も近く何等の方法で帝都拳士を統一し拳技協会を作るべく寄々相談中である（以下略）」（読売 昭和三（1928）年三月三十日）

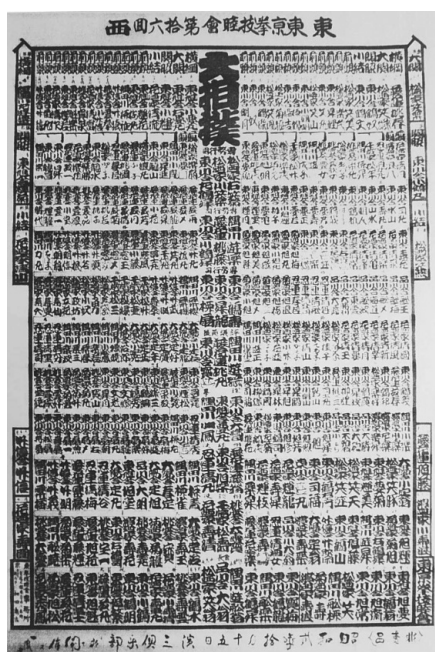
との記事がある。見出しには「統一」とあるが、実際には「いずれ統一」と言うことであって、この時点では統一されていない。実際に統一されるのはこの二年後の昭和五年で、次のように「三年振りに和解」という記事がある。

「この藤八拳の玄人、と云っても趣味の余技に打つ人々だが東京だけで五百人からいる。この拳士連により今から十数年以前に「東京拳技睦会」が設立され毎月一日十五日の二回蔵前植木屋を会場として星取り拳大会が継続されてきたが昭和元年末に至り或る事情から睦会は二派に分裂し紛らはしくも同じ睦会の名称で対立して今日に及ん

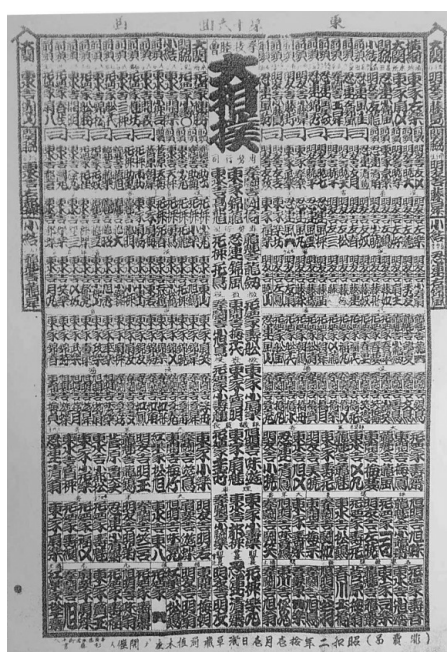
だものである。ところが最近両派間に和解案が持ち上がり東川舎鶴翁、隅田川遊船の両氏と東水舎小旭齋氏とが両派代表として折衝した結果愈よ廿五日夜両派代表委員十余名が顔を合せ目出たく和解成立の運びとなる。」（読売 昭和五（1930）年八月二十五日）

したがって、昭和元年末から昭和五年八月までは二派に分裂していたことがわかる。何が原因であったのかは残念ながら資料が無く、現在の睦会の人間もわからないとのことである。一つの手がかりとして、前記昭和三年の新聞記事に「勝敗にこだわるがあまり、軟拳と称する拳に陥ってしまう」とあることから、正しい形で打って勝敗を二の次にする派と、形は悪くとも勝敗にこだわる派に分かれたのではないかと推察される。記事の内容は記者が役員会に出席した者に取材したものと考えられ、自分達のことを「邪道」と悪く言うことは考えられないので、このとき集まった十二の連が正しい形にこだわった派と考えられる。

昭和二年の第16回の番付というものが二種類発見されている。一枚は屋号を見てみると「東家」「忍連」「明友舎」「拳闘舎」「花廼家」「龍魁舎」「東水舎」などがある。もう一枚は「藤花連」「松廼家」「東川舎」「菊廼家」「隅田川」「東旭舎」「桃雲舎」「品川舎」



【図54 第十六回番付1】



【図55 第十六回番付2】



「浜廻家」「太陽舎」「千歳家」であり、明らかに分裂していたことがわかる。

昭和三年の役員会の翌日の新聞には、

「4月1日浜三倶楽部で役員会があり、集まったのは夢丸、浜セン、行司に遊蝶、柱に一鳳、鶴明、寿楽、桃丸が務めた（以下略）」（読売 昭和3（1928）年四月二日）とある。これらの名前が後者の番付に見られることから、後者が昭和三年の記事に見える十二軒の家元と考えられる。ただ、後者の番付をよく見てみると「花廻家」と「忍連」の屋号は両方の番付に見られる。この二つの連は統一が取れずに双方に属する者がいたと考えられる。和解後の翌昭和六年の第19回番付では、東川舎、東水舎、隅田川など分裂していた連が双方とも載っており、和解がなされたことがわかる。

第二次大戦前の睦会の番付は昭和七年の第22回番付までが見つかるが、いつまで続いたのかははっきりしない。江戸東京博物館の川上香氏が東翁斎（幫間の桜川善平、大正元（1912）年～平成7（1995）年）氏に取材した内容では

「東八拳も昭和10年頃には自然消滅してしまった。」<sup>76)</sup>

ということである。そして東翁斎氏は、

「清水組に勤めていた、久保田孫一さんと言う人が翁斎さんの師匠の東川舎鶴翁をたずね、（中略）もう一度拳を復興したいと相談を受け、当時残っていた各派の家元のところをまわって、復興に尽力した。」「昭和14年頃拳は復興し、昭和16年の3月5日には銀座の松坂屋6階で「銃後健全拳大会」を開いた。」<sup>77)</sup>

と語っている。

久保田孫一氏の『東八拳道』にも、

「最近東八拳の健全なる発達、一般大衆的普及を目指してさらに、大同団結して大日本東八拳道会を結成し、（中略）大いに斯道の向上発展を企図している」<sup>78)</sup>「昭和十六年三月六日、夕刊大阪新聞の主催で東京、京都、大阪の会の者が集まって大阪松坂屋で大会が開催され、東京より拳士東家司楽外十四名（中略）、京都より早間文調、大阪のイ菱等会集千余名の盛大なる東八拳道会があつた」<sup>79)</sup>

とある。しかし三月五日の東京の会も、翌三月六日の大阪の会も新聞記事とはなっていない。千余名は誇張したものだろう。

昭和十六年七月には東拳舎天堂（久保田孫一）氏が『東八拳道』を出版しているが、

「（翁斎さんと久保田氏で）共著で本を出そうとしていたが、翁斎さんが出征したため久保田氏がひとりで出してしまった」<sup>80)</sup>

## 日本の拳遊戯（中）

ということである。昭和十七年には大日本東八拳道会としての第一回番付が発行されている。しかしながら翌年の番付はない。戦争の影響であろうか、大きな集まりは持てなかったものと考えられる。

【図56 大日本東八拳道会第一回番付（昭和十七年）】

### ③ 東京以外の藤八拳

ここで、東京以外の藤八拳に触れておく。

まず大阪であるが、明治三十四年の『大阪経済雑誌』（大阪経済社）に藤八拳番付が載っており、六世家元義浪（伊藤嘉兵衛）が家元となっている。

明治三十五年に天王寺区四天王寺の寿法寺に打拳塚が建立された。塚の裏面には「明治壬寅建立故六世義浪社中」と刻まれている。明治で壬寅は三十五年しかない。前年の番付で家元であった伊藤嘉兵衛氏が亡くなったのを悼んでのことと考えられる。

昭和六年には中川重理（イ菱）が『藤八拳独習』を出版している。ここにも番付が掲載されており、宗家は赤松義浪となっている。巻末に名簿が載っており、『大阪経済雑誌』の番付の「大関 赤松喜之助 喜義」が七世義浪を名乗ったことが知れる。義浪は大阪の本拳の宗家的な拳名であったが、ここで藤八拳の家元としてなっており、本拳の団体はなくなっていたと考えられる。

昭和十六年に夕刊大阪新聞の主催で東京、大坂、京都の拳士の集まりがあったことは



先に書いたが、「大阪のイ菱等会集千余名の盛大なる東八拳道会があった」<sup>81)</sup>とあり、大阪からは千人以上集まったと記述されている。『藤八拳独習』(昭和六年)の巻末には会員名簿があり、記載されているのは約60名であるので「千余名」はやはり誇張したものと考えられる。

京都では明治三十九年の番付が発見されており二百名以上の名前が記載されている。番付が作られる程盛んに行われていたようである。見出しには「京都 拳大相撲」とあり、本拳なのか藤八拳なのかははっきりしないが、明治以降本拳の会があった記録は見つかっておらず藤八拳と考えられる。

『藤八拳独習』には、京都の家元として早間文調、元老として五名の名前が記されている。『東八拳道』にも「京都には早間文調翁を中心とする一派があり、現在二代目文調及び高弟二山、山花がある。」<sup>82)</sup>とあるが、『東八拳道』に記載されている会の次第では、この会に参加したのは早間文調氏一人だったようである。この時点では京都の藤八拳はほとんど行われていなかったのではないかと考えられる。

#### (4) 第二次大戦後の藤八拳

戦後わずかな人数で開始したと思われるが、道具が不要の遊戯だったこともあってか、十年程度でかなりの人数に戻ったようである。東翁斎氏は、

「昭和26年頃当時の東家司楽さんが一万円出して番付を作り新富町の見番で第一回日本藤八拳技睦会が行われた」<sup>83)</sup>

と語っている。

昭和30年の写真誌『サングラフ』には、関東藤八拳大会と題した見開きの頁があり、

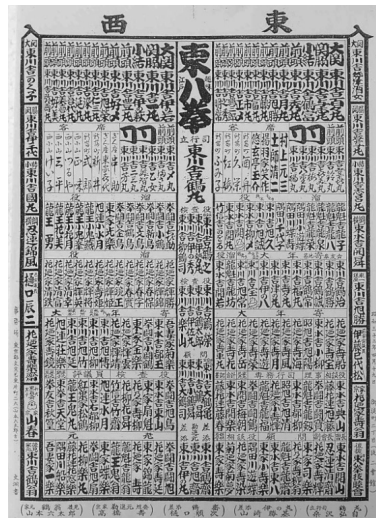


【図57 東八拳(『世界画報』昭和30年)】



【図58 関東藤八拳大会(『サングラフ』昭和30年)】

日本の拳遊戯（中）



【図59 昭和33年番付】

栃木県足利市の足利公園で大会が開かれ130人が集まったとの記事がある。

昭和三十五年、東川舎伊の丸こと山崎一夫氏が睦会を脱退してさくら会を興した。氏は、半ば破門のような形で睦会を脱会したため東川舎という屋号を持たず、伊の丸の名称のみで活動する。しかし、伊の丸氏はマスコミに顔がきいたということで、この後しばらく新聞や雑誌に登場する東八拳はほとんどさくら会である。

新聞にも時おり藤八拳の記事が掲載されている。

「昭和49年、60人参加して藤八拳大会（5周年を記念して）花柳楽丸会長。」（読売 昭和四十九（1974）年五月十二日）

「昭和50年、昨年結成された松廻家25人。」（読売 昭和五十（1975）年三月三日）

「家元三家が合同襲名披露 花柳、中王、吾妻屋の3家。現在、都内の家元は21団体あり、睦会の会員は約百人。番付は45年以来発行されていない。」（読売 昭和五十六（1981）年十二月五日）

その後は数年に一度、新聞に載る程度であった。睦会は平成元年より毎年番付を発行している。

平成九（1997）年、睦会の松本吉弘氏（当時の拳名は東家扇楽、現在は武蔵野狐太良）が『江戸の花 東八拳をお楽しみください』を刊行した。

平成十（1998）年、ウィーン大学のセップ・リンハルト教授が『拳の文化史』を刊行した。



【図60 「東八拳」はいかが?」  
 (『週刊大衆昭和35 年2月8日  
 号(通巻95号)』)



【図61 「東八拳」  
 (『歴史読本昭和38年8月号』)]

平成十一（1999）年、東京都渋谷のたばこと塩の博物館で「拳の文化史」展が開催された。会期中、睦会とさくら会が拳を実演披露し、セップ・リンハルト教授の講演も行われた。

平成二十三（2011）年、神楽坂の東八拳が新宿区の文化財に認定された。

睦会、さくら会ともに現在も活動中である。しかしながら他の伝承遊戯同様、人数は減少傾向にあり昭和五十六年の新聞にあった花柳、松廼家、中王、吾妻屋といった屋号は現在存在しない。数人の家元が活動しているのみで、横綱となった人間が新たな家元となって屋号を持つことで家元の数を保っており、決して将来を楽観視できない状況にある。しかし、藤八拳は発生以来連綿と伝えられてきており、流行り廃りの時期はあったものの、競技者の絶えたことのない稀有な遊戯とすることができる。遊びであることや道具を用いないものであることから文化財的な価値を認められにくいのであろうが、無形の文化財として価値を認め、長く続く措置を計るべきと考える。

【注】

- 43) セップ・リンハルト『拳の文化史』59頁  
44) 『遊びの大事典』678頁  
45) 中村幸彦校注『風来山人集』136頁  
46) 『日本特撮・幻想映画全集』180頁  
47) じぶくるは無理を言ってすねること。  
48) 直前に本拳のことが記述されている。  
49) 中野三敏校訂『砂払（下）』岩波書店、128頁  
50) 奉行のこと。  
51) リンハルト、前掲書、99頁  
52) 鸚鵡石は歌舞伎の台詞などを記載した小冊子。  
53) 服部龍太郎著『民謡のふるさと』139～140頁  
54) 前田伍健と表記されることもある。  
55) この拳は 当て物拳（相手と同じ形を出すと負けになる拳）という情報の方が多かったが、3 すくみとして遊ばれる方もあったという情報もあった。  
56) 鳥井正之助『秘芸の魁 拳独稽古』22～23頁  
57) 加藤美侖『是丈は心得おくべし』136～137頁  
58) 西原柳雨『川柳江戸名物』春陽堂、150～151頁  
59) 調査所に肥後熊本・木村藤八郎とあるので、本家である長崎・綿谷藤八の真似ではないかと考えられる。  
60) 郡司正勝校注『東海道四谷怪談』21～22頁  
61) 酒井欣『日本遊戯史』第一書房、835頁  
62) 田井真孫『色模様 江戸から東京へ』138頁  
63) 本名 桑沢弘自（1912～1995）。拳名は東川舎鶴丸、後に東<sup>あづま</sup>翁齋となった。  
64) 『加治木郷土史』614頁  
65) 東拳舎天堂『東八拳道』15頁  
66) 初出は三田村鳶魚『国本』大正14年5月号となっている。  
67) リンハルト、前掲書、157頁  
68) リンハルト、前掲書、161頁  
69) 森銑三、北川博邦監修『近世風俗見聞集』282頁  
70) 佐竹昭広他編『新日本古典文学大系 100』357頁  
71) 三浦梧楼『明治反骨中條一代記』43頁  
72) 好拳生「藤八拳名流略伝」『演芸画報 第一巻10号』96頁  
73) 東拳舎天堂、前掲書、118頁  
74) 東拳舎天堂、前掲書、16頁  
75) 東拳舎天堂、前掲書、111～112頁  
76) 川上香「東八拳に関する一考察」『東京都江戸東京博物館研究報告 第1号』82頁  
77) 川上香、前掲書、82頁  
78) 東拳舎天堂、前掲書、16頁  
79) 東拳舎天堂、前掲書、17頁  
80) 川上香、前掲書、82頁  
81) 東拳舎天堂、前掲書、17頁  
82) 東拳舎天堂、前掲書、17頁  
83) 川上香、前掲書、82頁

【参考文献】

第5章 比較の拳  
風来山人『根無草 後篇』岡本利兵衛、宝暦十三年～明和六年

義浪、吾雀『拳会角力図会（上）（下）』河内屋太助、文化六（1809）年  
 柳亭種彦『三虫母戦』文政二（1819）年  
 山桜連々、逸軒揺舟『拳独稽古』文政十三（1830）年  
 小寺玉晃『尾張童遊集』天保二（1831）年  
 万亭応賀『幼稚遊昔雛形』天保十四（1843）年  
 梅暮里谷義『拳早指南』安政三（1856）年  
 ウィリアム・グリフィス著、山下英一訳『皇国』明治九（1876）年  
 立野藤治郎『御伽智恵競』山岸佐吉、明治十四（1881）年  
 永井良知編『東京百事便』三三文房、明治二十四（1891）年  
 鳥井正之助『秘芸の魁 拳独稽古』中島抱玉堂、明治二十五（1892）年  
 如電居士「拳の事」『風俗画報 51～62号』明治二十六（1893）年  
 愛花情史他『粹人遊びの友』明二十六（1893）年、  
 松室八千三『遊芸』鹿田書店、明二十六（1893）年、  
 猪里重次郎『酒席遊戯』玉潤堂、明治二十九（1896）年  
 下田歌子『女子遊喜の栞』博文館、明治三十三（1900）年  
 『大阪経済雑誌 第九年拾六号』大阪経済社、明治三十四（1901）年  
 山中共古『甲斐の落葉（上）（下）』明治三十四（1901）年  
 橋詰良一『新案色彩遊戯』明治三十五（1902）年  
 中川重理『室内運動競技の随一・藤八拳独習』イ菱倶楽部、明治三十五（1902）年  
 西沢一鳳「皇都午睡」『新群書類従 第1』国書刊行会、明治三十九（1906）年  
 大愚堂主人「拳の話」『演芸画報 第1巻7号』演芸画報社、明治四十（1907）年  
 無名氏「拳の話」『演芸画報 第1巻8号』演芸画報社、明治四十（1907）年  
 拳好生「藤八拳名流略伝」『演芸画報 第1巻10号』演芸画報社、明治四十（1907）年  
 小山田（高田）と清「松屋筆記」市島謙吉編『松屋筆記 第一』国書刊行会、明治四十一（1908）年  
 小西可東『拳の打ち振り』春江堂、明治四十二（1909）年  
 河尻清潭編『酒席の遊び』笑社出版所、明治四十四（1911）年  
 晴光館編集部『現代娯楽全集』晴光館書店、明治四十四（1911）年  
 大通散士『宴会お座敷芸』盛陽堂書店、明治四十四（1911）年  
 小沢卯之助『本邦固有遊戯全書』国民教育社、大正元（1912）年  
 山桜連々、逸軒揺舟「拳独稽古」『雑芸叢書 第1』国書刊行会、大正四（1915）年  
 大郷信斎「道聴塗説」早川純三郎編『鼠璞十種 第二』国書刊行会、大正五（1916）年  
 『江戸惣まくり』江戸叢書刊行会、大正六（1917）年  
 青文堂編集部『あごはずし 抱腹絶倒』青文堂、大正七（1918）年  
 『中外商業新報』大正九（1920）年  
 加藤美侖『是丈は心得おくべし』誠文堂、大正十（1921）年  
 華城山人『正調安来節の唄ひ方 踊り方と拳の打方』文耕堂、大正十一（1922）年  
 村上静人『縁結娘色の糸』人情本刊行会、大正十五（1926）年  
 三田村鷹魚『瓦版のはやり唄』春陽堂、大正十五（1926）年  
 松亭金水「縁結娘色の糸」『人情本刊行会第二輯』人情本刊行会、大正十五（1926）年  
 中内蝶二『娯楽大全』誠文堂、昭和二（1927）年  
 横光利一『時間』昭和五（1930）年  
 河竹黙阿弥『三人吉三廓初買』春陽堂、昭和六（1931）年  
 「一向不通替善連」『洒落本大系第6巻』六合館、昭和六（1931）年  
 中里機庵『綿羊娘情史』赤炉閣書房、昭和六（1931）年  
 横浜市役所『横浜市史 風俗編』横浜市役所、昭和七（1932）年  
 若山善三郎『尾張童遊集』名古屋温古社、昭和九（1934）年  
 酒井欣『日本遊戯史』建設社、昭和十（1935）年  
 三田村鷹魚『江戸百話』大日社、昭和十四（1939）年



## 日本の拳遊戯（中）

- 久保田孫一『健全娯楽・東八拳道』精神科学出版社、昭和十六（1941）年  
小高吉三郎『日本の遊戯』拓石堂出版、昭和十八（1943）年  
田井真孫『色模様 江戸から東京へ』20世紀社、昭和三一（1956）年  
山東京伝『通言総籙』『日本国民文学全集17』河出書房、昭和三十一年（1956）年  
中島海『遊戯大事典』昭和三十二（1957）年  
三田村鳶魚『江戸生活事典』青蛙房、昭和三十三年（1958）年  
Stuart Culin『GAMES OF THE ORIENT』the Charles E. Tuttle Company、昭和三十五（1960）年  
中村幸彦校注『風来山人集』岩波書店、昭和三十六（1961）年  
伊原敏郎『歌舞伎年表第6巻』岩波書店、昭和三十六（1961）年  
矢野目源一『娯楽大百科』金園社、昭和三十七（1962）年  
「生きている歴史38 東八拳」『歴史読本 昭和38年3月8日号』人物往来社、昭和三十八（1963）年  
鈴木棠三『絵本江戸風俗往来』平凡社、昭和四十（1965）年  
花咲一男『川柳江戸名物図絵』近世風俗研究会、昭和四十一年（1966）年  
服部龍太郎『民謡のふるさと』朝日新聞社、昭和四十二年（1967）年  
菊池貴一郎著、鈴木棠三編『絵本江戸風俗往来』平凡社、昭和四十三年（1968）年、  
エドワード・シルベスター・モース著、石川欣一訳『日本その日その日 3』平凡社、昭和四十五  
（1970）年  
井口洋『風月外伝をめぐって』『国語国文40巻1号』京都大学国文学会、昭和四十六（1971）年  
「東海道四谷怪談」上演 文政八（1825）年郡司正勝校註『新潮日本古典集成45』新潮社、昭和四十六  
（1971）年  
『週刊現代 4月13日号』講談社、昭和四十七（1972）年  
伊原敏郎編『歌舞伎年表』、岩波書店、昭和四十八（1973）年  
金子倉吉監修、石崎利内著『新和菓子大系（下巻）』金子嘉正、昭和四十八（1973）年  
山崎美成「三養雑記」日本随筆大成編集部『日本随筆大成第2期6』吉川弘文館、昭和四十九（1974）  
年  
柴村盛方「飛鳥川」『日本随筆大成第2期10』吉川弘文館、昭和四十九（1974）年  
著者未詳「続飛鳥川」『日本随筆大成第2期10』吉川弘文館、昭和四十九（1974）年  
三田村鳶魚「伝説した明治初年のトテツル拳」『三田村鳶魚全集・第19巻』中央公論社、昭和五十一  
（1976）年  
三田村鳶魚「チョンキナ」『三田村鳶魚全集・第20巻』中央公論社、昭和五十二（1977）年  
喜多川信節「ききのまにまに」『未刊随日筆百種』中央公論社、昭和五十二（1977）年  
『月刊総務』ウィズワークス、昭和五十二（1977）年  
中野幸彦、中野三敏校訂『東洋文庫 甲子夜話4』平凡社、昭和五十三（1978）年  
中野幸彦、中野三敏校訂『東洋文庫 甲子夜話5』平凡社、昭和五十三（1978）年  
中野幸彦、中野三敏校訂『東洋文庫 甲子夜話続編3』平凡社、昭和五十三（1978）年  
フィッセル「日本風俗備考」庄司三男訳『東洋文庫 日本風俗備考』平凡社、昭和五十三（1978）年  
吉井始子他翻刻『翻刻 江戸時代料理本集成 第十巻』臨河書店、昭和五十六（1981）年  
郡司正勝校注『東海道四谷怪談』新潮社、昭和五十六（1981）年  
山東京伝「通気粹語伝」『洒落本大成15』中央公論社、昭和五十七年  
「見通三世相」『洒落本大成十六巻』中央公論社、昭和五十七（1982）年  
塵哉翁「巷街贅説」森銑三他編『続日本随筆大成別巻 近世風俗見聞集10』吉川弘文館、昭和五十八  
（1983）年  
『月刊百科』平凡社、昭和五十八（1983）年  
ウィリアム・グリフィス『明治日本体験記』平凡社、昭和五十九（1984）年  
長田純『町かどの芸能（下）』近代文芸社、昭和五十九（1984）年  
朝倉治彦編『日本名所風俗図会』角川書店、昭和六十一（1986）年  
岸野雄三他編『最新 スポーツ大事典』大修館書店、昭和六十二（1987）年  
「滑稽有馬紀行」板坂耀子『江戸温泉紀行』平凡社、昭和六十二（1987）年



中野三敏校訂『砂払（下）』岩波書店、昭和六十二（1987）年  
 小俣保太郎編『伝記叢書46』大空社、昭和六十三（1988）年  
 太田才次郎著、瀬田貞二解説『日本児童遊戯集』平凡社、平成元年（1989）年  
 鈴木棠三『近世庶民生活史料 藤岡屋日記 3巻』三一書房、平成元年（1989）年  
 鈴木棠三『近世庶民生活史料 藤岡屋日記 5巻』三一書房、平成元年（1989）年  
 鈴木棠三『近世庶民生活史料 藤岡屋日記 6巻』三一書房、平成元年（1989）年  
 成島柳北「柳橋新誌」佐竹昭広他編『新古典日本文学大系100』岩波書店、平成元年（1989）年  
 セップ・リンハルト「チョンキナ」『視覚の十九世紀』思文閣出版、平成四（1992）年  
 国会図書館図書部『諸色調類集目録・天保御改正諸事留目録（諸事留の内）』国立国会図書館、平成五（1993）年  
 赤穂敬也『じゃんけんぼん』近代文芸社、平成七（1995）年  
 中村幸彦校註『東海道中膝栗毛』小学館、平成七（1995）年  
 石川英輔『大江戸番付づくし』実業之日本社、平成十三（2001）年  
 喜多村信節『嬉遊笑覧』岩波書店、平成十七（2005）年  
 石塚豊芥子「近世商売狂歌合」『日本随筆大成〈第三期〉4』吉川弘文館、平成十九（2007）年

## 第6章 藤八拳

夏目漱石『道草』明治三十九（1906）年  
 夏目漱石『坊っちゃん』明治三十九（1906）年  
 小俣保太郎編『観樹湘軍回顧録』政教社、大正十四（1925）年  
 西原柳雨『川柳江戸名物』春陽堂、大正十五（1926）年  
 中川重里『藤八拳独習』イ菱倶楽部、昭和六（1930）年  
 城昌幸「藤八拳ごろし」『富士 第3巻4号』世界社、昭和二十五（1950）年  
 藤掛寅七編『面白倶楽部』光文社、昭和二十九（1954）年  
 『世界画報 昭和30年1月号』国際情報社、昭和二十九（1955）年  
 小宮豊隆編纂『明治文化史 第十巻 趣味・娯楽編』洋々社、昭和三十（1955）年  
 「関東藤八拳大会」『サングラフ7月号』サン出版社、昭和三十（1955）年  
 田井真孫『色模様 江戸から東京へ』20世紀社、昭和三十一年（1956）年  
 「“東八拳”はいかがが?」『週刊大衆 1960年2月8日号（通巻95号）』双葉社、昭和三十五（1960）年  
 朝倉治彦、稲村徹元編『明治世相編年事典』東京堂、昭和四十（1965）年  
 花咲一男『江戸のくすりや』近世風俗研究会、昭和四十一（1966）年  
 斎藤月岑著、金子光晴校註『武江年表』平凡社、昭和四十八（1973）年  
 八世板東三津五郎『歌舞伎 花と実』玉川大学出版部、昭和五十一（1976）年  
 槌田満文『明治大正風俗語典』角川書店、昭和五十四（1979）年  
 「たち、にの、しめ! 藤八拳抄々」『江戸っ子 27号』アドファイブ、昭和五十五（1980）年  
 三浦梧楼『明治反骨中條一代記』芙蓉書房、昭和五十六（1981）年  
 藤井宗哲『たいこもち（割間）の生活』雄山閣、昭和五十七（1982）年  
 「東八拳、知ってますか?」『太陽 昭和57年12月号』平凡社、昭和五十七（1982）年  
 森銃三他編『続日本随筆大成別巻 近世風俗見聞集10』吉川弘文館、昭和五十八（1983）年  
 長田純『町かどの芸能（下）』文化出版局、昭和五十九（1984）年  
 悠玄亭玉介『たいこもち玉介一代』草思社、昭和六十一（1986）年  
 小泉和子『道具が語る生活史』朝日新聞社、平成元（1989）年  
 佐竹昭広他編「江戸繁盛記」『新日本古典文学大系100』岩波書店、平成元（1989）年  
 中村喬訳注『中国の酒書』平凡社、平成三（1991）年  
 セップ・リンハルト「十七・十八世紀の日本における拳」藤井譲治、横山俊夫編『安定期における人生の諸相：仕事と余暇』京都ゼミナールハウス、平成三（1991）年  
 『薬事日報 8130号』薬事日報社、平成五（1993）年  
 吉岡信『江戸の生薬屋』青蛙房、平成六（1994）年

## 日本の拳遊戯（中）

- 『自由時間 No.94 (1995.1月5,19日号)』マガジンハウス、平成七(1995)年  
川上香「東八拳に関する一考察」『江戸東京博物館研究報告 第1号』江戸東京博物館、平成七(1995)年  
松本吉弘『江戸の華・東八拳をお楽しみ下さい。』近代文芸社、平成九(1997)年  
寒川恒夫「じゃんけん」『民俗遊戯大事典』大修館書店、平成十(1998)年  
セップ・リンハルト『拳の文化史』角川書店、平成十(1998)年  
たばこと塩の博物館編『拳の文化史・じゃんけんばかりが拳じゃない』たばこと塩の博物館、平成十一(1999)年  
「楽しき哉、拳の道」『なごみ 1999年12月号』淡交社、平成十一(1999)年  
赤穂徹也『再考 じゃんけんぼん』近代文芸社、平成十二(2000)年  
セップ・リンハルト「拳の研究の意味」『I S』ポーラ文化研究所、平成十二(2000)年  
セップ・リンハルト「日本の文化における拳遊びおよび三疎みの意味」『学術月報』日本学術振興会、平成十九9(2007)年  
日本随筆大成編集部『日本随筆大成 第三期第四巻』吉川弘文館、平成十九(2007)年  
セップ・リンハルト「上方絵に見る拳遊び」橋爪節也他『新菜箸本撰 第6号』心齋橋研究同人、平成二十(2008)年  
「にぎわう東八拳会場」『アサヒカメラ』朝日新聞出版、平成二十四(2012)年